

2017 年の異文化間教育学会年次大会は、杜の都、仙台に 5 つのキャンパスを構える東北大学で開催させていただくことになりました。

東北大学は、日本で三番目の帝国大学として 1907 年に創立しました。「研究第一主義」「門戸開放」「実学主義」の理念に基づき、早くから、独創的な研究成果を社会に発信しつつも、学生に対する教育への還元、社会や人々の日常生活に役立てる伝統も育んできました。他大学に先駆けて、専門学校、高等師範学校の卒業生にも広く門戸を開き、時の政府の圧力に屈することなく、日本の大学として初めて女子学生を受入れたことでも知られています。また、海外からの留学生に博士号を授与した第一号の大学でもあり、魯迅が医学生として学んだ階段教室は今でも大切に保存されています。現在では世界各国から 3000 人近くの留学生を受け入れ、国際色豊かなキャンパスが建学の理念を具現化しています。

2009 年には、国際化拠点整備事業（大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業、通称グローバル 30）、2012 年には経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成推進事業、2014 年にはスーパーグローバル大学創成支援事業に全て全学型で採択され、英語のみで学位が取得できる学部、大学院プログラムを新・増設しました。これらの大学の国際化施策で拡充を図ったのが、本大会での主テーマ、「留学生と日本人学生が共に学ぶ国際共修」です。国際共修の意義、教育・学習効果、カリキュラムのみならず、授業設計や教授法について、国内外の事例に学びながら皆様と議論を深めていきたいと思っています。その他にも、プレセミナーでは、多文化化に対応できる学校教員の育成を考える特別企画を用意して皆様の参加をお待ちしております。

折角の機会ですので、新鮮な魚介類や名物の牛タン、地元の銘酒や温泉をお楽しみいただき、復興・再生に一丸となり取り組む地域社会にエールをお願いできれば幸いです。

異文化間教育学会
第 38 回大会準備委員会
委員長 末松和子

大会参加者へのご案内

大会日程

大会会期：2017（平成 29）年 6 月 17 日（土）－ 6 月 18 日（日）

会 場：東北大学川内キャンパス 文科系総合講義棟、中講義棟

※懇親会：2017 年 6 月 17 日（土） 17:30-19:00 会場：文科系総合講義棟コモンスペース

※プレセミナー：2017 年 6 月 16 日（金） 13:00-16:30 会場：宮城教育大学萩朋会館 2 階大集会室

参加資格

会員・非会員を問わず、どなたでもご参加いただけます。

参加申し込み

事前申し込みをされる方は、大会参加費および懇親会費を、5 月 15 日（月）までにお振込みください。

5 月 16 日以降は、大会当日に当日料金をいただくことになりますことをご了承ください。

web 入力をお願い

5 月 15 日（月）までに参加申し込みを希望される方は、会員・非会員とも以下の第 38 回大会ホームページ内「参加・発表の申し込み」ページよりお手続きください。

(<http://www.intercultural.jp/iesj2017/apply.html>)

大会参加費および懇親会費

		事前料金 (5 月 15 日まで)	当日料金
大会参加費	正会員	5,000 円	6,000 円
	学生会員	3,000 円	4,000 円
	通信会員	5,000 円	6,000 円
	非会員（一般）	6,000 円	7,000 円
	非会員（学生）	4,000 円	5,000 円
	維持会員	1 口 1 名様無料	7,000 円
	名誉会員	ご招待	
懇親会	正会員	4,500 円	5,000 円
	学生会員	2,000 円	3,500 円
	通信会員	4,500 円	5,000 円
	非会員（一般）	4,500 円	5,000 円
	非会員（学生）	3,000 円	4,000 円
	維持会員	4,500 円	5,000 円
	名誉会員	ご招待	

お払い込みいただいた参加費などは、理由を問わず返却いたしません。予めご了承ください。

- 参加費をお振込みいただく際は、参加者1名につき1枚の払込取扱票をご使用ください。領収書は、当日に受付でお渡しいたします。
- 6月17日は午前9時より、18日は午前8時45分より受付を行ないます。受付にて名札をお受け取りいただき、大会会期中はその名札をご着用ください。
- 特定課題研究、公開シンポジウム、個人発表、共同発表、ケース/パネル発表、ポスターセッションの発表者および司会者の方は「発表者・司会者受付」にお越しください。
- 会場には一般来訪者用の駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。
- 6月17、18日は一部の学生食堂及び学内のカフェが開いています。開店時間が限られているところもありますので、ご注意ください。
- 宿泊は各自でご手配ください。

連絡先

大会・Web 申し込み・お支払いに関するお問い合わせ

異文化間教育学会大会ヘルプデスク

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 (株)国際文献社内

E-mail : iesj-desk@bunken.co.jp

Fax : 03-5227-8632

会員登録に関するお問い合わせ

異文化間教育学会事務局会員業務係

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 (株)国際文献社内

E-mail : iesj-post@bunken.co.jp

Fax : 03-3368-2822

大会当日に関するお問い合わせ

第38回大会準備委員会

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

東北大学高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンター 末松和子研究室内

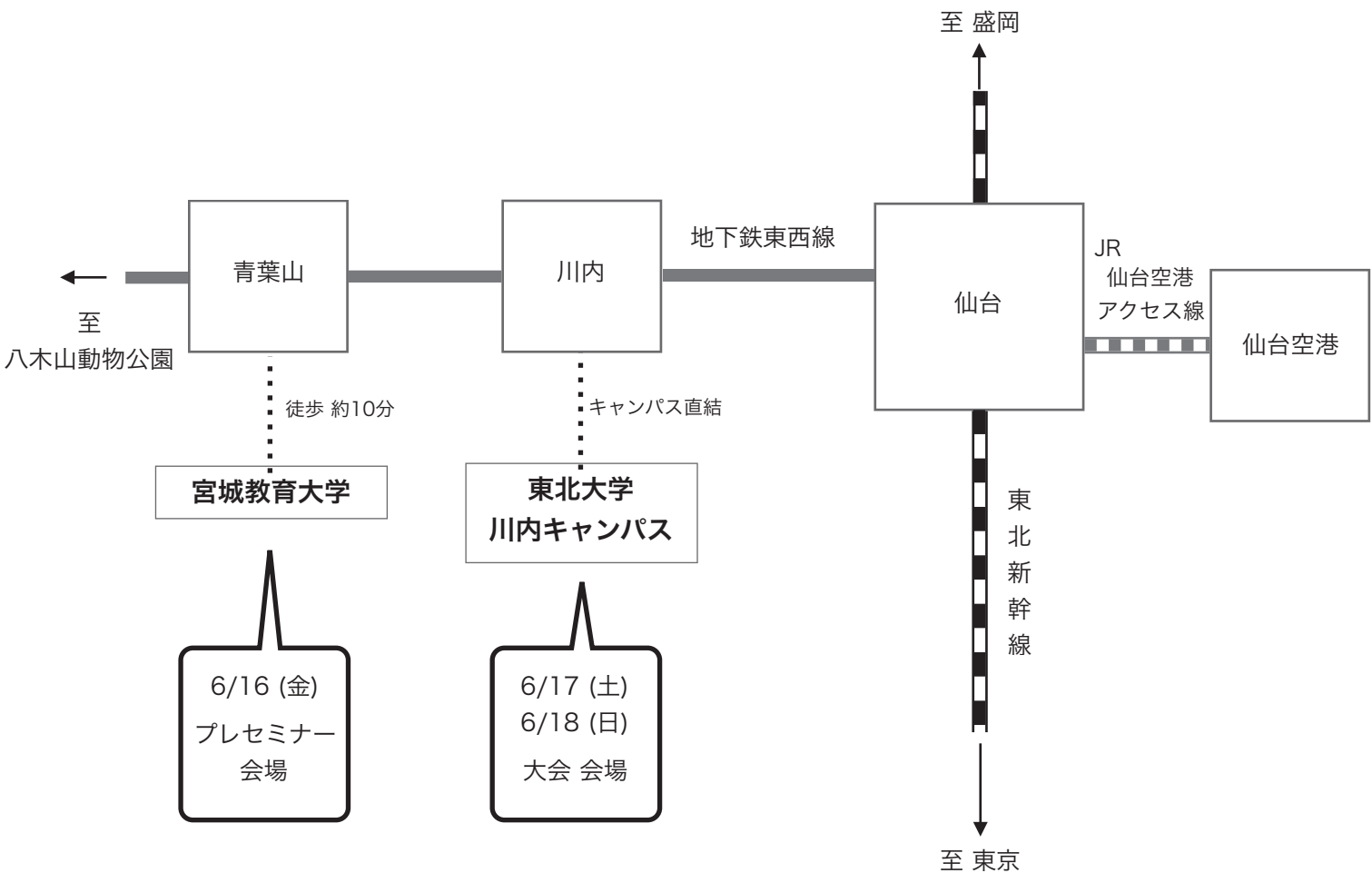
E-mail: ibunkakan38@gmail.com

大会日程

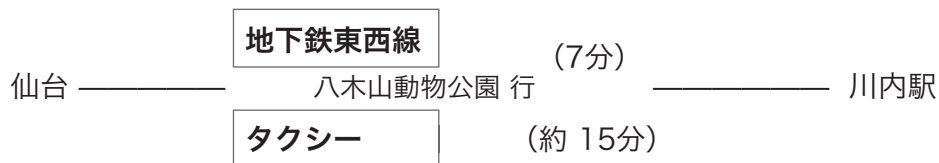
	6月16日(金)	6月17日(土)			6月18日(日)	
8:45					8:45- 受付	
9:00		9:00- 受付			9:00-12:00	
9:30		9:30-12:00 特定課題研究 「異文化間能力を生かす―実践に向けて」			公開シンポジウム 東北大学グローバル・イニシア ティブセミナー ～国際共修:留学生と国内学生 の学びあいをデザインする～	
12:00		12:00-13:00 昼食	12:00-13:00 若手交流会	12:00-13:00 紀要編集委員会 広報・情報化委員 会 企画・交流委員会 研究委員会	12:00-13:00 昼食	12:00-13:00 若手交流委員 会
12:30	12:30ー 受付					
13:00	13:00-16:30 プレセミナー 「多文化化に対応できる学校 教員の育成を考えるセミ ナー」	13:00-14:00 総会			13:00-15:00 個人発表	13:00-14:30 ケース/パネル
14:00		14:00-15:00 ポスターセッション※				
14:30						
15:00		15:00-17:00 ポスターセッション ※	15:00-17:00 個人発表	15:00-17:00 共同発表		
16:30						
17:00	17:00-19:00					
17:30	理事会	17:30ー19:00 懇親会				
19:00						
19:30						

※ 1日目14:00-15:00のポスターセッションについては、発表者に必ず在席していただきます。
1日目15:00-17:00、2日目9:00-14:30のポスターセッションは、任意の在席となります。

会場へのアクセス



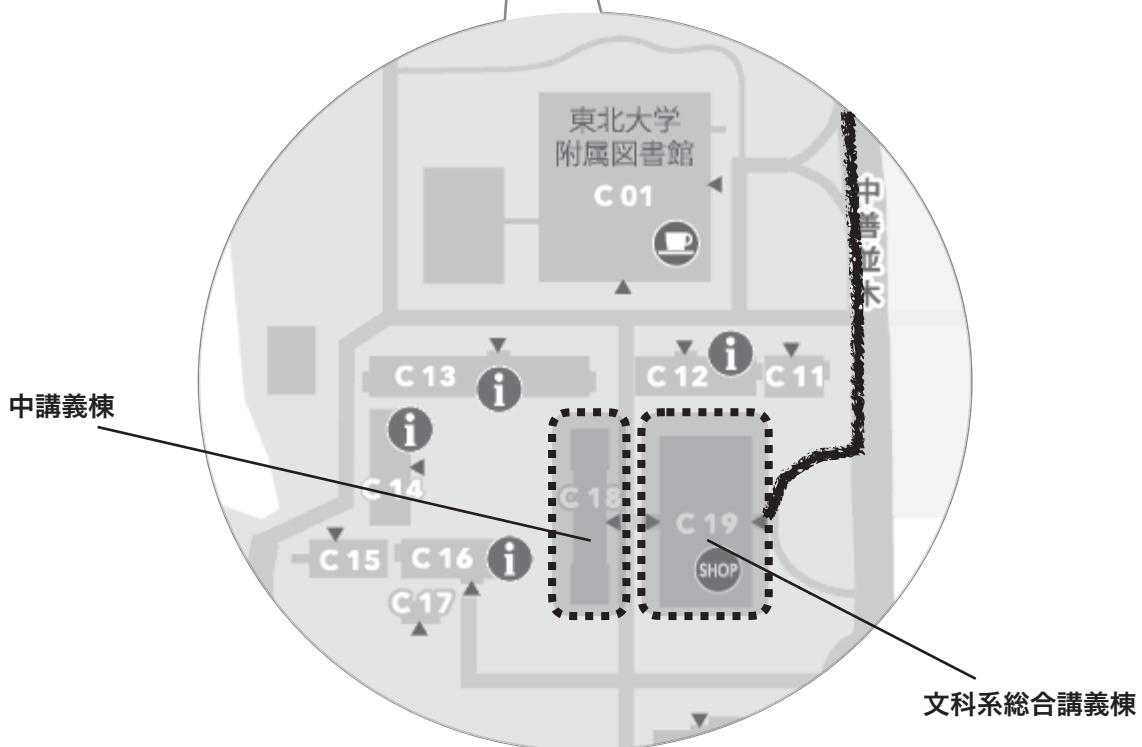
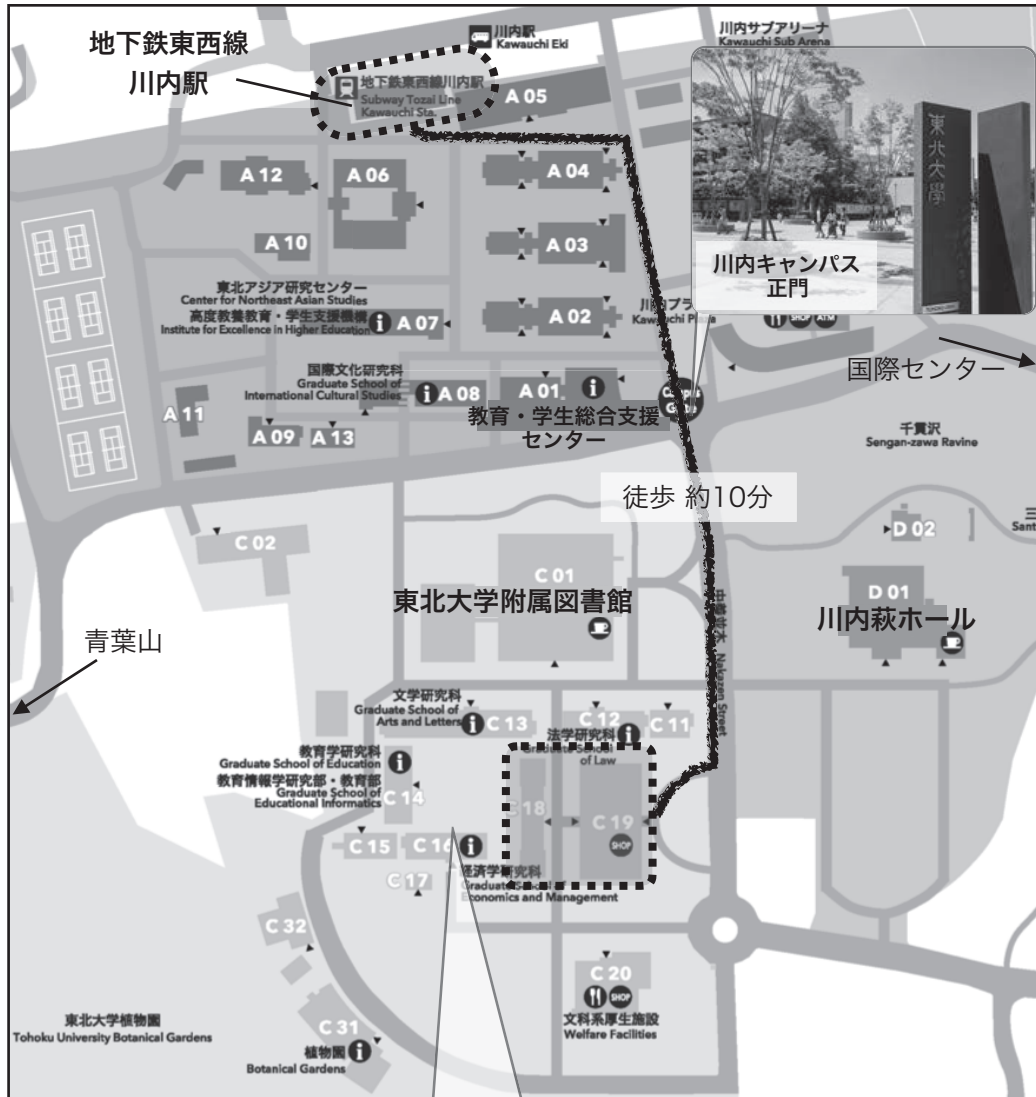
◎主要駅からの所要時間



キャンパスマップ

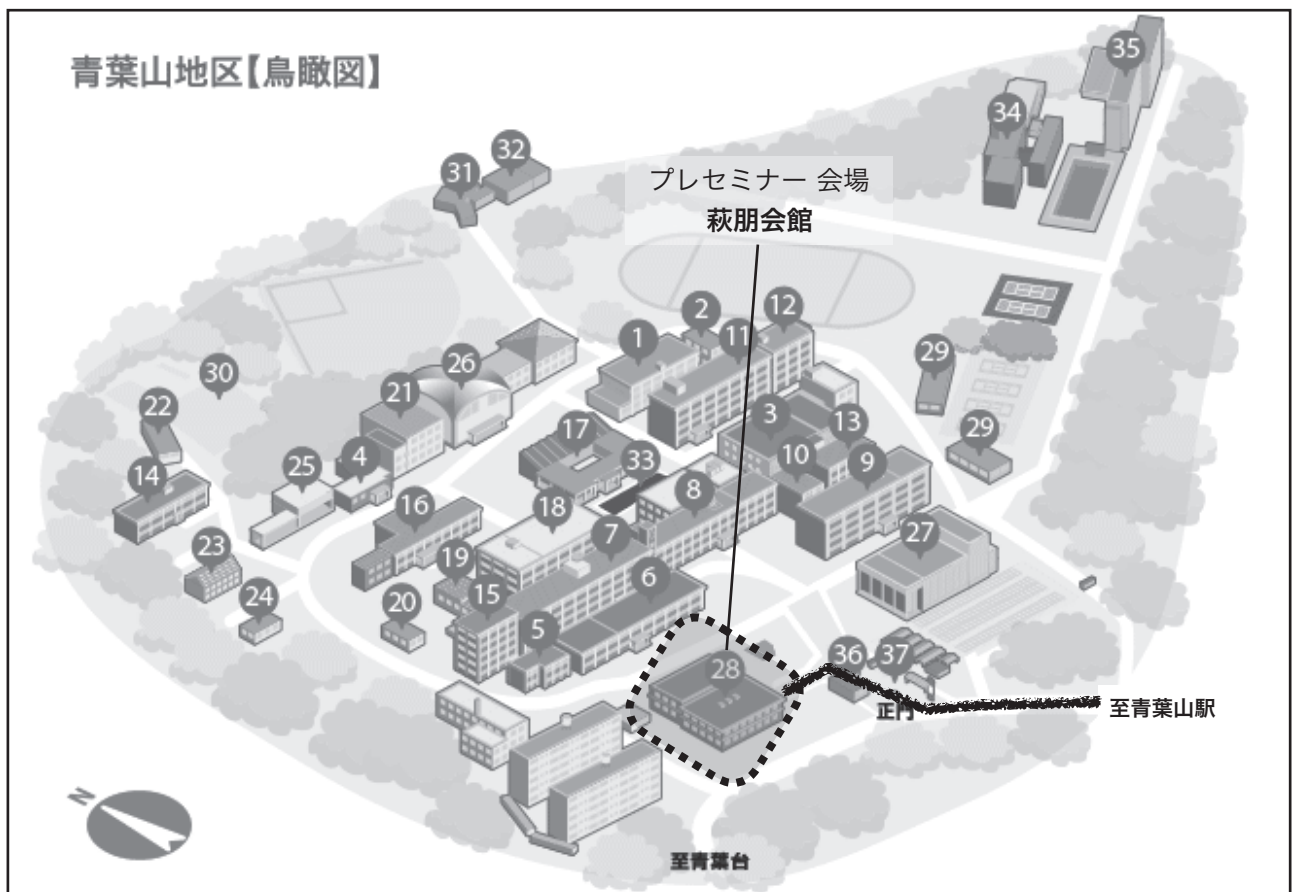
東北大学

- ◆ 6月17日(土)、18日(日)の会場は「東北大学 川内キャンパス」です。
- ◆ 大会は「文科系総合講義棟」と「中講義棟」で行われます。



宮城教育大学

- ◆ 6月16日(金)のプレセミナー会場は「宮城教育大学」です。
- ◆ プレセミナーは「萩朋会館」で行われます。



会場案内

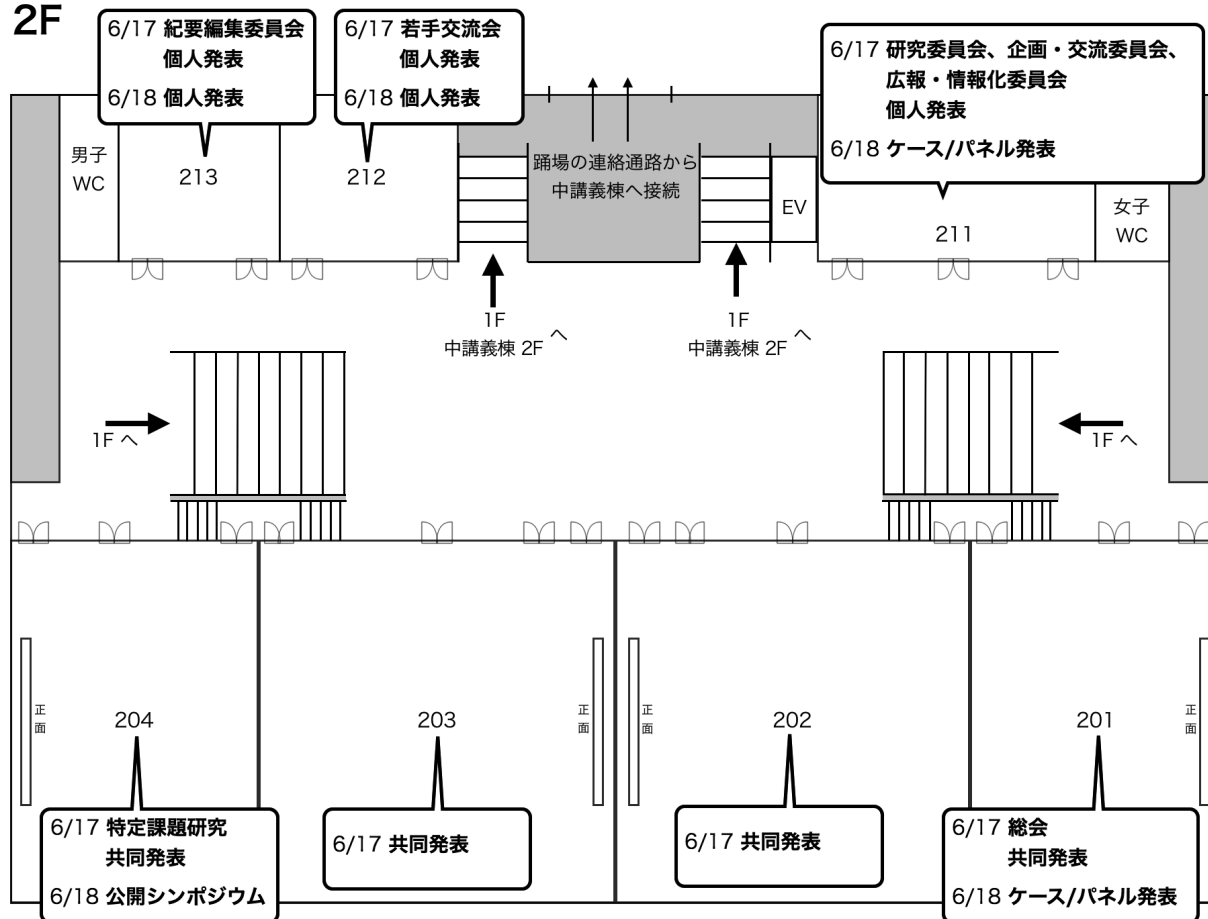
大会前日 6月16日（金） 宮城教育大学萩朋会館 2F 大集会室		
プレセミナー受付	12:30-	
プレセミナー	13:00-16:30	
理事会	17:00-19:00	東北大学川内キャンパス 教育・学生総合支援センター西棟中会議室
大会第1日 6月17日（土） 東北大学 文科系総合講義棟、中講義棟		
受付	9:00-	文科系総合講義棟 1F ホール
特定課題研究	9:30-12:00	文科系総合講義棟 2F 204
若手交流会	12:00-13:00	文科系総合講義棟 2F 212
各種委員会		
広報・情報化委員会	12:00-13:00	文科系総合講義棟 2F 211
企画・交流委員会	〃	文科系総合講義棟 2F 211
紀要編集委員会	〃	文科系総合講義棟 2F 213
研究委員会	〃	文科系総合講義棟 2F 211
ポスターセッション	14:00-17:00	文科系総合講義棟 1F ホール
総会	13:00-14:00	文科系総合講義棟 2F 201
個人発表	15:00-17:00	文科系総合講義棟 1F、2F、中講義棟 2F 各教室
共同発表	15:00-17:00	文科系総合講義棟 2F 201、202、203、204 中講義棟 2F 文学部第2講義室
懇親会	17:30-19:00	文科系総合講義棟 1F コモンスペース
大会第2日 6月18日（日） 東北大学 文科系総合講義棟、中講義棟		
受付	8:45-	文科系総合講義棟 1F ホール
公開シンポジウム	9:00-12:00	文科系総合講義棟 2F 204
若手交流委員会	12:00-13:00	文科系総合講義棟 1F 103
ポスターセッション	9:00-14:30	文科系総合講義棟 1F ホール
個人発表	13:00-15:00	文科系総合講義棟 1F、2F、中講義棟 2F 各教室
ケース／パネル発表	13:00-14:30	文科系総合講義棟 2F 201、211
■大会本部		文科系総合講義棟 1F 103
■学会本部		文科系総合講義棟 1F 104
■昼食会場・休憩室		文科系総合講義棟 1F コモンスペース
■会員打ち合わせ室・控え室		文科系総合講義棟 1F コモンスペース
■書籍展示		文科系総合講義棟 1F ホール

※クロークはありませんので各自管理下さい。

文科系総合講義棟

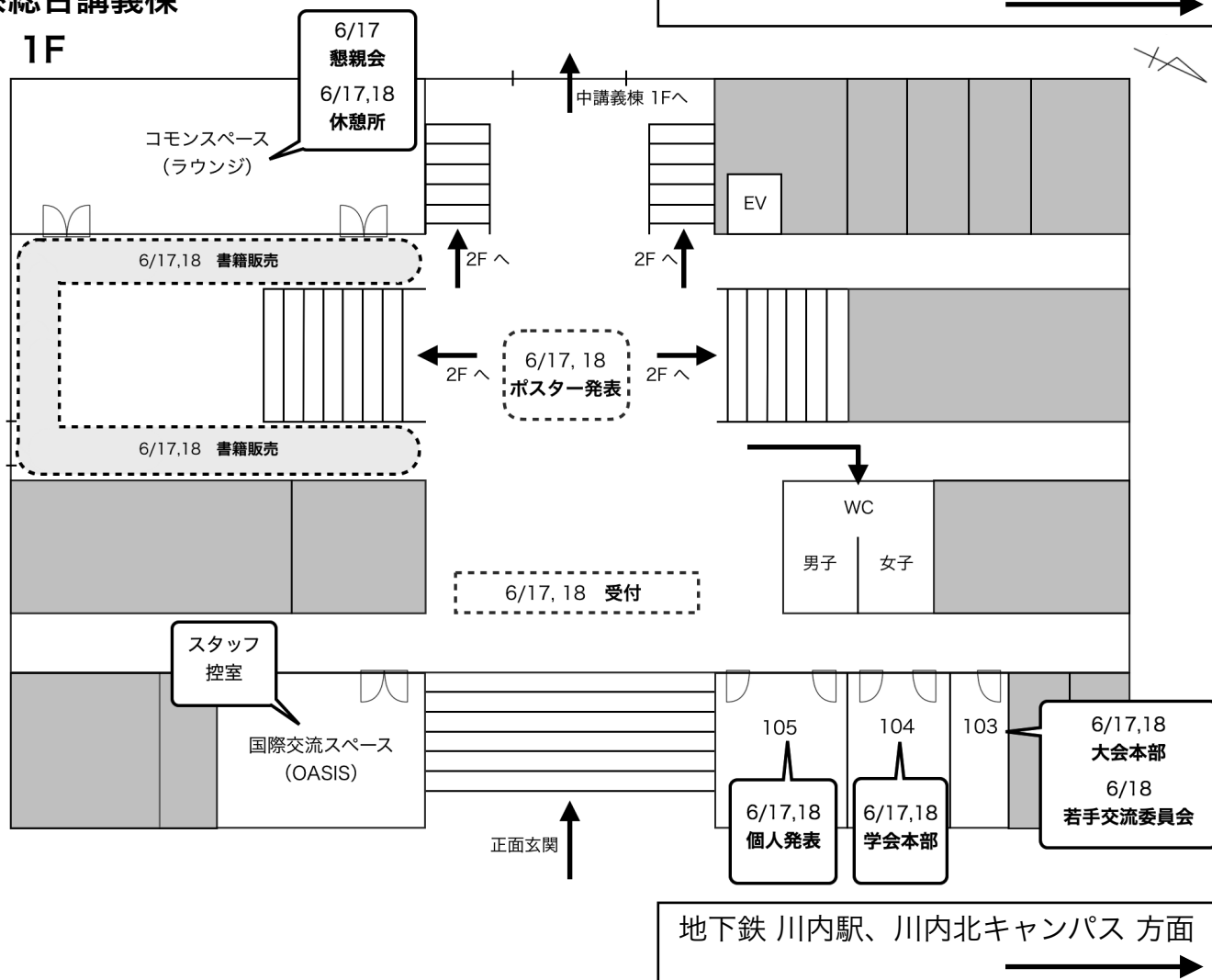
フロアマップ

2F

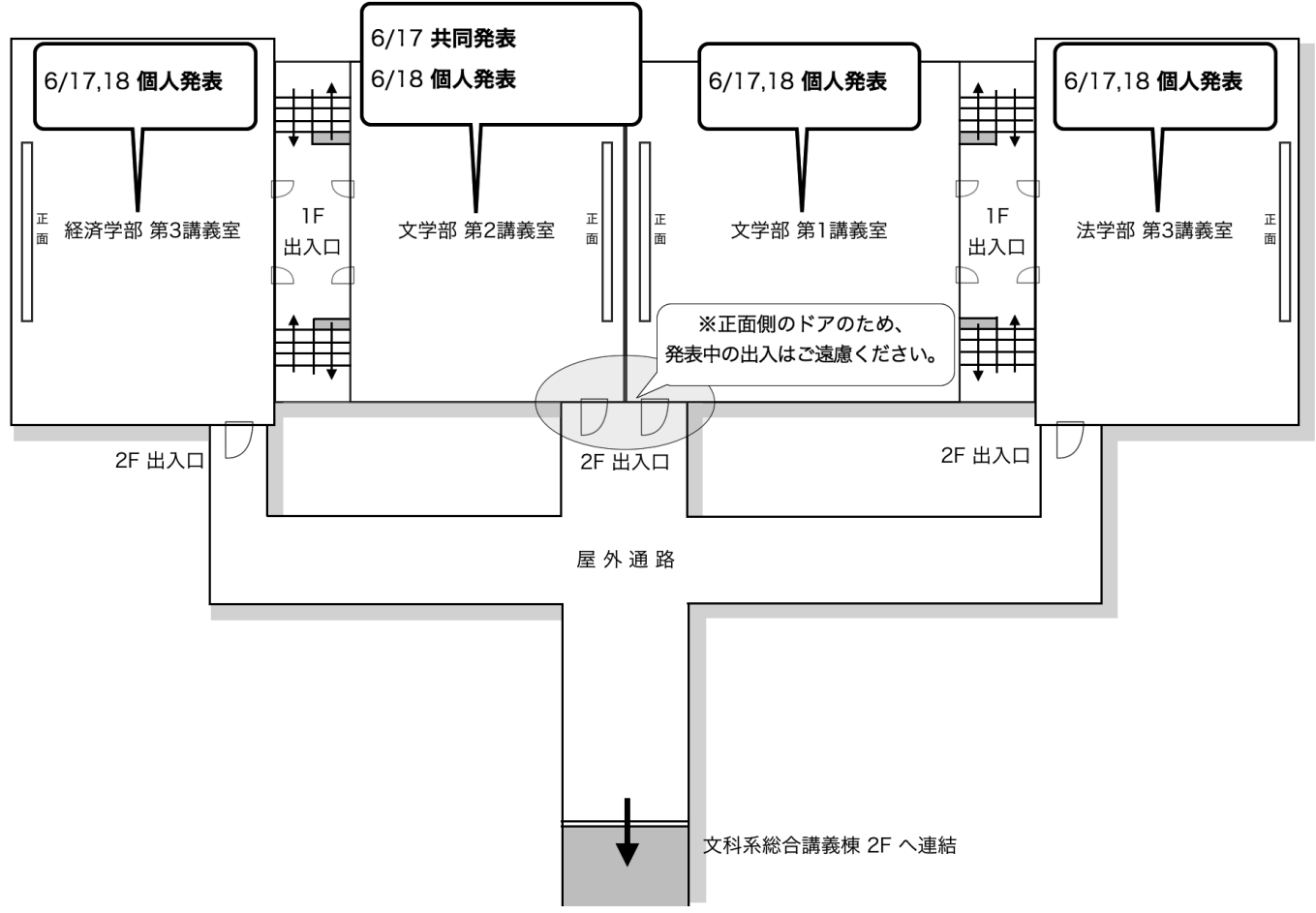


文科系総合講義棟

1F

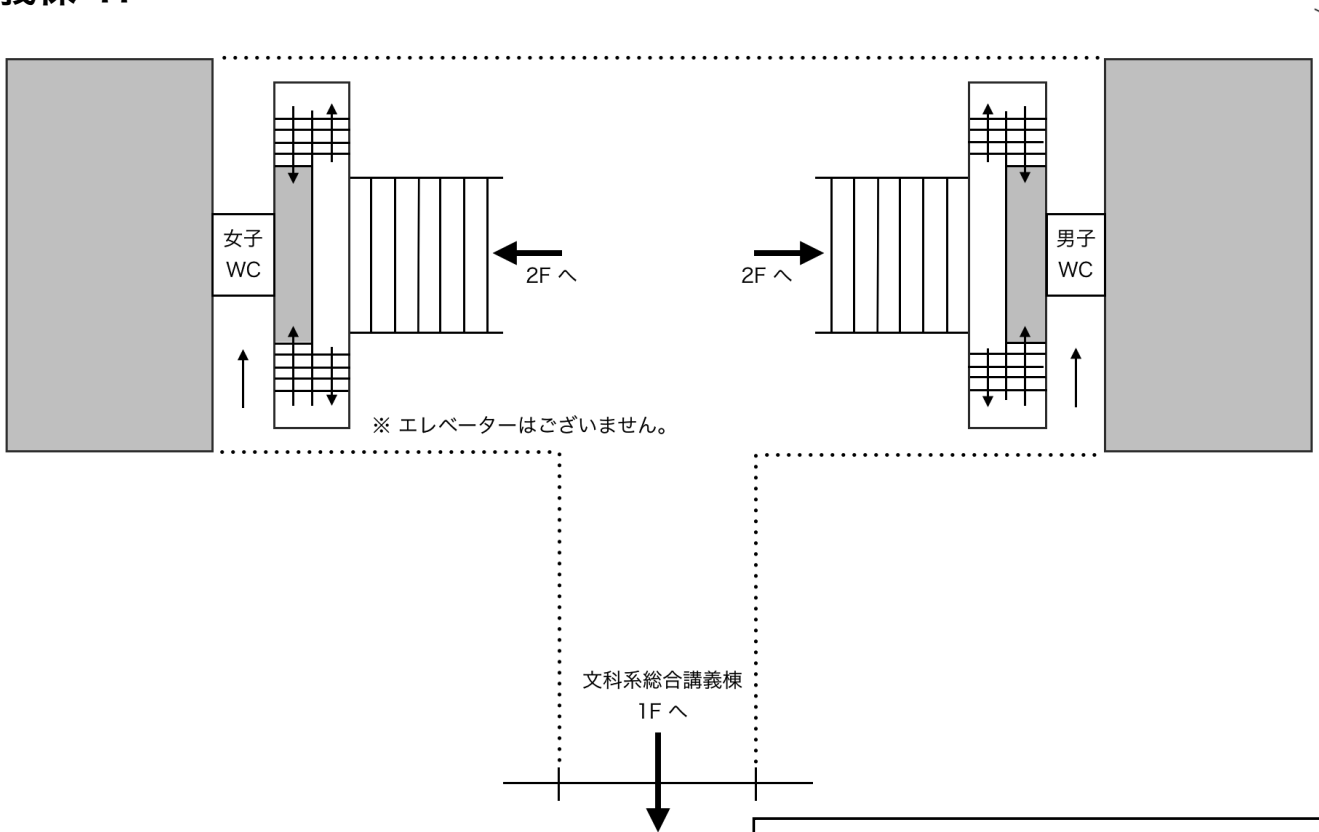


中講義棟 2F



地下鉄 川内駅、川内北キャンパス 方面

中講義棟 1F



地下鉄 川内駅、川内北キャンパス 方面

プレセミナー

日時：6月16日（金）13:00-16:30（受付開始 12:30）

場所：宮城教育大学萩朋会館 2 階 大集会室

多文化化に対応できる学校教員の育成を考えるセミナー

■ 企画趣旨：

今日の地域の多文化化や、グローバル化への対応で学校教育に求められる事柄は数多く、それらを学校教員養成のプロセスに反映させなければなりません。実際には、多文化化に対応できる教員（多文化教員）養成のための大学における体系的なカリキュラムの考察や実践の共有は進んでおらず、個別の試みにとどまっています。そこで、本セミナーでは、義務教育段階の学校教員の養成に焦点を当てて、（１）多文化教員養成のためのカリキュラム設計、（２）多様な価値観を体験的に学ぶための海外研修のあり方、（３）外国人児童生徒に対応できる多文化教員養成の取組みについて、複数の実践事例を示し、参加者とのワークショップを通して、研究者・実践者のネットワーク化を図ることを目指します。

■ 講師：市瀬智紀氏（宮城教育大学 教授）

高橋亜紀子氏（宮城教育大学 教授）

浜田麻里氏（京都教育大学 教授）

■ 募集人員：60名（定員になり次第、先着順にて締め切らせていただきます。）

■ プレセミナー参加費：

学生会員	3,000 円	正会員・通信会員	4,000 円
非会員	5,000 円	非会員（学生）	4,000 円

■ お申し込み方法：大会 HP よりお申し込みください。

<http://www.intercultural.jp/iesj2017/apply.html>

■ 申込み問い合わせ先：

異文化間教育学会第 38 回大会ヘルプデスク iesj-desk@bunken.co.jp

■ プレセミナー問い合わせ先：

第 38 回大会準備委員会 e-mail：ibunkakan38@gmail.com

プレセミナー問い合わせ先 e-mail：ichinose@staff.miyakyo-u.ac.jp

特定課題研究

日時：平成 29 年 6 月 17 日（土）9:30～12:00

場所：東北大学川内キャンパス 文科系総合講義棟 204

異文化間能力を生かす

—実践に向けて—

技術革新に伴いグローバル化が加速する中で、異なる文化との接触や交流は、日常化している。一方で、地球規模の相互依存は進行し、異なる人々と協働して、問題解決を図っていくことに迫られている。地球の縮小化が進み、文化的に異なる人々との相互の交流や依存が深まる今日的な状況に直面して、異文化間能力(intercultural competence)は、だれにでも求められる資質・能力の一つとなったといえる。

本特定課題研究ではこれまで、重要性を増している異文化間能力の概念に焦点をあてて検討を進めてきた。1 年次は、異文化間能力という概念そのものを対象とし、異文化間教育学会を構成する会員の多様な視点から、異文化間能力とは何かについてその構成要素やモデルについて検討した。こうした議論を踏まえ、2 年次である本年度は、異文化間能力という概念を使い、いかにその育成や評価に生かしていけばよいのかなど、異文化間能力の活用について考察している。

■ コーディネータ 森茂岳雄（中央大学）

発題 1 教室型実践における異文化間能力育成

—国際バカロレアに基づいた中学校社会科での育成プロセスを事例に—

津山直樹（東京学芸大学附属国際中等教育学校/中央大学大学院）

発題 2 海外日本語教師アシスタント実習プログラムにおける異文化間能力

—日本人性に着目して—

青木香代子（茨城大学）

発題 3 地域日本語教育が育む異文化間能力

—対話を通じて—

中川祐治（福島大学）

■ ディスカッサント 工藤和宏（獨協大学）

■ 企画:研究委員会

森茂岳雄（委員長 中央大学）

松尾知明（副委員長 法政大学）

中川祐治（福島大学）

齋藤ひろみ（副委員長 東京学芸大学）

青木香代子（茨城大学）

塘利枝子（同志社女子大学）

異文化間能力を生かす —実践に向けて—

森茂岳雄（中央大学）・齋藤ひろみ（東京学芸大学）・松尾知明（法政大学）
青木香代子（茨城大学）・中川祐治（福島大学）・塘利枝子（同志社女子大学）

1. テーマ設定の理由

技術革新に伴いグローバル化が加速する中で、異なる文化との接触や交流は、日常化している。一方で、地球規模の相互依存が進行し、異なる人々と協働して、問題解決を図っていくことに迫られている。地球の縮小化が進み、文化的に異なる人々との相互の交流や依存が深まる今日的な状況に直面して、異文化間能力(intercultural competence)は、だれにでも求められる資質・能力の一つとなったといえる。例えば、大学教育、海外研修、国際理解、多文化共生に関わるプログラムやコースの成果指標として、異文化間能力の評価が実施されている場合も少なくないだろう。

このような異文化間能力に関する研究は、日本ではあまり進んでいないものの、国際的には大きな発展がみられる。とくに近年では、グローバル化の進展に伴い研究も増加しており、異文化間能力の用語を書名にもつハンドブック(Deardorff,2009)や事典(Bennett,2015)も編纂されている。ハンドブックの中では、1章で異文化間能力の概念化を試みる22のモデルが(Spitzberg & Changnon,2009)、27章で44の異文化間能力のアセスメントツールの概要が紹介されている(Fantini, 2009)。異文化間能力の研究や実践の領域としては、後述のように、異文化間能力の(1)定義、(2)育成、(3)アセスメントなどがある(Deardorff,2015)。

本特定課題研究ではこれまで、この注目を集めている異文化間能力の概念に焦点をあてて検討を進めてきた。昨年度は、異文化間能力という概念そのものを対象とし、異文化間教育学会を構成する会員の多様な視点から、異文化間能力とは何かについてその構成要素やモデルについて検討した。こうした議論を踏まえ、本年度の研究では、異文化間能力という概念を使い、いかにその育成や評価に生かしていけばよいのかなど、異文化間能力の活用について考察している。また、異文化間能力を生かす研究や実践の批判的な検討も試みている。

2. 異文化間能力を生かす研究や実践—定義、育成、アセスメント

異文化間能力の概念を活用する研究や実践に関して、(1)定義、(2)育成、(3)アセスメントの三つの領域に分けて検討したい。

第一に、育成したい能力目標やその評価規準として活用するために、ある具体的な文脈で必要とされる異文化間能力の定義を試みる研究が考えられる。異文化間能力の定義をめぐっては、長年にわたって検討されてきたものの、グローバルコンピテンス(global competence)、文化的知能(cultural intelligence)、異文化への敏感さ(intercultural sensibility)などを含み、学問領域、アプローチ、文脈によって異なる用語が使用され、その概念についてのコンセンサスはまだ得られていない。他方で、異文化間能力の定義をすることが、その育成やアセスメントに生かす際の前提となるため、活用する具体的な文脈で求められる異文化間能力を同定する基礎研究が広く進められている。

第二に、異文化間能力の概念は、そうした能力の育成や開発に生かすことが考えられる。その概念を要として、目標を設定し、学習する内容や活動を選択し、そうした能力を育成するための効果的な教育プログラムがデザインされ、実施されることになる。プログラム開発をめぐり、具体的な文脈において、異文化間能力をいかに育成するのかについての研究が進められており、また、ベストプラクティスの同定や効果のある学習活動の開発などが追究されている。

第三に、異文化間能力の概念は、評価規準として、そうした能力のアセスメントに生かすことが考えられる。同概念を基礎にして、どのようなアセスメントを設計するのか、いずれのアセスメントツールを選択するのかなど、より効果的な評価デザインにするための検討が進められている。アセスメントに関しては、数多くのアセスメントツールがすでに開発されているなど関心が高いが、最近では、こうした伝統的な個人のアセスメントを超えて、異なる集団間で効果的に行動する能力やそうした集団の関係形成を含んで、観察による行為のアセスメントへと関心が移行する傾向にある。

3. 異文化間能力を生かすことをめぐる課題

グローバル化が進む中で、異文化間能力の概念を手がかりに、その育成をめざす教育プログラムやアセスメントの開発が求められている。一方で、こうした試みには、いくつかの課題が残されている。

第一に、異文化間能力を研究や実践に生かしていくためには、異文化間能力を定義して、それを要として教育プログラムやアセスメントを開発する際に克服すべき実践上の課題がある。異文化間能力の育成や評価を進めるには、領域、アプローチ、文脈などに対応させて具体的にプログラムやアセスメントを設計する必要がでてくる。その際、同概念を定義して、構成要素を同定し、それを基にプログラムやアセスメントをデザインする手続きやプロセスの妥当性や信頼性を検討することが課題となる。

第二に、異文化間能力の活用をめぐるのは、別の次元の課題もある。異文化間能力の概念を研究や実践に生かそうという試みは、そもそも可能であるのか、意味があるのか、かえって悪影響を及ぼしているのではないかなどといった問いである。異文化間能力の概念を基に、プログラムの開発や評価に生かそうという研究や実践自体の妥当性を問う必要があるだろう。意味ある形で、異文化間能力とは定義ができるのか、評価できるのかなど根本的な再検討が必要であるように思われる。また、異文化間能力に基づく教育実践をめぐるメリットと同時にデメリットといった視点からの検討も必要である。

異文化間能力を生かす試みには、教育プログラムやアセスメントを開発し、実施していく際に克服すべき課題が残されているのである。

参考文献

- Bennett, J. M. (Ed.) (2015) *The Sage Encyclopedia of Intercultural Competence*, Sage Publications.
- Deardorff, D. K. (Ed.) (2009). *The SAGE Handbook of Intercultural Competence*, Sage Publications.
- Deardorff, D. K. (2015). Intercultural Competence: Mapping the Future Research Agenda, *International Journal of Intercultural Relations* 48, 3-5.
- Fantini, A. E. (2009). Assessing Intercultural Competence: Issues and Tools, In D. K. Deardorff (Ed.), *The SAGE Handbook of Intercultural Competence*, Sage Publications, 456-476.
- Huber, J. & Reynolds, C. (2014). *Developing Intercultural Competence through Education*. Council of Europe.
- Spitzberg, B. H. & Changnon, G. (2009). Conceptualizing Intercultural Competence, In D. K. Deardorff (Ed.), *The SAGE Handbook of Intercultural Competence*, Sage Publications, 2-52.
- UNESCO (2013). *Intercultural Competences*, Paris: Author.
- Van de Vijver, F. J. R. & Leung, K. (2009). Methodological Issues in Researching Intercultural Competence, In D. K. Deardorff (Ed.), *The SAGE Handbook of Intercultural Competence*, Sage Publications, 404-435.

教室型実践における異文化間能力育成

—国際バカロレアに基づいた中学校社会科での育成プロセスを事例に—

津山直樹（東京学芸大学附属国際中等教育学校/中央大学大学院）

1、本研究の目的と分析の視点

本研究では、学校の教室で実践される授業においてどのように異文化間能力を育成するかを研究課題とし、その育成プロセスを分析することで異文化間能力の育成をめざす授業実践の効果と課題を示すことを目的とする。

工藤和宏の異文化間教育学における実践的な手法の分類によると、ここで取り上げる実践は「(1)教室型の手法」であり、「(1)学習者の態度変容や能力の向上の重視」「(2)教育者と学習者の固定的な役割と関係性」という二つの傾向を持つもの（工藤、2016：104）である。このことを踏まえて「学習者の態度変容や能力の向上」プロセスを分析するために分析の視点としてナラティブ・アプローチを採用する。また、分析するナラティブは、教育者（授業実践者である筆者）がグローバル化に対応するために必要な資質・能力を学習者（生徒）に習得・活用させるために実施したパフォーマンス評価の評価対象となる課題に対しての生徒たちの成果物や振り返りコメントなどである。

野口裕二によるとナラティブ・アプローチとは「なんらかの現象を研究したり、なんらかの対象に働きかける実践をする際に、ナラティブという形式を手がかりにする」（野口、2009：18）アプローチであるという。本研究では、学習者の異文化間能力を育成するために教育者がどのように働きかけるのかを明らかにする。ここでの働きかけとは、教育者が設定する授業の目標、教育内容や授業形態の選択、パフォーマンス評価のための課題や教師と生徒の対話や生徒同士の対話など授業における実践そのものも含まれる。このように教育者の働きかけと学習者の語り直しの相互作用を分析する。

次に、パフォーマンス評価であるが、西岡加名恵によると「知識やスキルを使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求めるような評価方法の総称」と定義しており、そのために必要なのが「様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題」である「パフォーマンス課題」であるとしている（西岡、2016：20）。また、「パフォーマンス課題」を実施する際に、ルーブリックは教育者が設定したパフォーマンス課題の意図や手順、評価の観点を示している。これを学習者に事前に提示することで、教育者の働きかけを共有できるという点で教育者と学習者の関係性に大きな影響を与える。

以上をふまえて、国際バカロレア（International Baccalaureate、以下 IB と略）認定校で、筆者が実践した社会科の授業実践を分析する。

2、IB と異文化間能力

本研究で取り上げる実践は、①学校教育の中で行われる授業という教室型実践であること、②IB のプログラムに基づいており、グローバル化に対応する資質・能力を育成する実践であることという二つの特徴がある。

「規準 A：知識と理解」「規準 B：調査」「規準 C：批判的思考」「規準 D：コミュニケーション」という「2013 年度第 1 学年基礎地理 評価規準（評価の観点）実践校バージョン」（IB の Middle Years Programme（以下 MYP と略）の Humanities（現在は Individuals and societies）のもの）と「社会的事象への関心・意欲・態度」「社会的な思考・判断・表現」「資料活用の技能」「社会的事象についての知識・理解」という「日本の中学校社会科地理的分野の観点別評価」のそれぞれの 4 観点を知識・技能・態度の三つの視点から分類し、本研

究における異文化間能力として示したのが、＜表 1＞である。本研究で取り上げる実践は、中学校社会科地理的分野における日本地理であり、年間を通してのテーマを「日本の多文化的状況を探る」に設定しており、「マジョリティとマイノリティ」や「ニューカマー」「オールドカマー」など在日の外国人に焦点を当てた学習内容を構成したため、＜表 1＞に示したような「異文化間能力」となった。

＜表 1＞IB の評価規準と社会科の観点別評価の 4 観点からみる異文化間能力

	Humanities	社会科	異文化間能力
知識	・規準 A「人文科学用語の正確性」「事実とアイデアについての詳細な知識と理解」	・社会的事象についての知識・理解「地域構成や地域的特色、地域の課題についての理解とその知識」	・日本の多文化的状況「マジョリティである日本人とマイノリティであるニューカマー・オールドカマーというカテゴリーの理解」「マイノリティについての知識」
技能	・規準 B「簡単な計画の実行」「いくつかの情報を収集、記録するために、複数の方法を正確に使用」 ・規準 C「アイデア、事象、論点または議論の要点」「多くの資料の分析」「異なる視点との識別」「情報を関連させ、妥当な意見を述べる」 ・規準 D「伝達の方法」「情報の組織立て」「出典の明示」	・社会的な思考・判断・表現「地理的事象を多面的・多角的に考察・公正に判断・適切に表現」 ・資料活用の技能「様々な資料の収集・情報の取捨選択・読み取り結果のまとめ」	・グローバル化による人の移動「日本の社会構造の変化の考察、グローバル時代における日本のこれからへの判断と自分の意見の表現」 ・マジョリティとマイノリティの現状をつかむ資料「当事者性をもたせることができる資料の比較・選択、読み取り、情報のまとめ」
態度	・探究する人「熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続ける」 ・振り返りができる人「自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所の理解」 ・規準 B「研究クエスションの選択と応答」	・社会的事象への関心・意欲・態度「地理的事象への関心を高め、意欲的に追究」「各地域の特色について認識を養おうとする」	・マジョリティの変容「日本人というカテゴリーの問い直しとそれに基づくこれからの日本人としてのあり方」 ・マイノリティの気づき「自分のアイデンティティはどのようなものかを認識するためのメタ認知」

本研究においてはこれからの異文化間教育学でますます重視される「カテゴリーの問い直し」や「自分自身のアイデンティティ認識のためのメタ認知」を「態度」とし、IB や日本の社会科と共通している点が多い「知識」「スキル」とあわせて異文化間能力とする。

3、まとめ

授業実践の分析の詳細は当日の報告にて行うが、本研究では異文化間能力を設定することで、教師が生徒の多様な側面に気づき、教師が設定した授業実践の予期していなかった新たな効果を検証できた。つまり、異文化間能力は教師と生徒の関係が固定的である教室型実践から教師と生徒の関係が固定的ではない生成的な実践へと転換させる契機になりえることを示した。

一方で、課題としては学校教育の中で異文化間能力を設定し、生徒の作品によりカテゴリーの組み替えを見取することは、どのくらい妥当性があるのかが挙げられる。この点は、生成的な実践を行う中で、異文化間能力をどのように設定すべきなのか、あるいは設定する必要があるのか（評価するかどうか）という授業実践の根本的な問題を提起している。

＜参考文献＞

- 工藤和宏（2016）「異文化間教育学の実践とその研究手法」佐藤郡衛・横田雅弘・坪井健編『異文化間教育のフロンティア』明石書店
- 西岡加名恵（2016）『教科と総合学習のカリキュラム設計－パフォーマンス評価をどう活かすか－』図書文化
- 野口裕二（2009）『ナラティブ・アプローチ』勁草書房

海外日本語教師アシスタント実習プログラムにおける異文化間能力

—日本人性に着目して—

青木 香代子（茨城大学）

1. はじめに

本発表では、A 大学においてグローバル人材育成推進事業の一環として実施されてきた SEND プログラム（海外日本語教師アシスタント実習プログラム）に参加した学生の異文化間能力を取り上げる。文部科学省は、グローバルな舞台で活躍できる人材に必要な要素の一つとして、「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を挙げている。ここでは、「日本人」とは誰のことを指すのかが問われることはないままに「日本人」が「異文化を理解する」とされている。同様に、本発表で取り扱うような海外体験プログラムにおける「異文化理解」というとき、「異文化」を理解しようとしているのは「(マジョリティの)日本人」であることがほとんどである。しかし、特権性を持つ「日本人」の側の視点が批判的に問われることなく、海外体験によって異文化に対する理解が深まり、意識変容が促されるとされることが多いのではないだろうか。海外体験プログラムは、「日本人であること」を問う（問い直す）きっかけとなる可能性があるはずであるが、その問いが深められることは少ないのではないだろうか。「異文化間能力をいかす」ことを考える際にも、「異文化」と接する、あるいは向き合う側の「(マジョリティという特権性を持った)日本人であること」の視点が必要であると考ええる。自文化の透明性（それまで当たり前と考えてきたこと）や日本人であることの特権性や優位性に気づき、自分や他者の文化やアイデンティティを相対的に捉え、自分とは異なる背景を持つ他者とよりよい関係を築いていくことが重要である。

本発表では、SEND プログラムに参加した学生の報告書の分析を中心に、「日本人性」から見た異文化間能力にはどのようなものが見られたか、また異文化間能力に含まれる日本人性の認識の段階にはどのようなものがあるかを明らかにすることを目的とした。

2. 先行研究の検討と分析枠組み

「日本人性」は、ホワイトネス研究の視座に着想を得たものである。ホワイトネスとは、Frankenberg (1993) によれば、歴史的、政治的、社会的、文化的、経済的に構築されてきたもので、アメリカ合衆国において「ヨーロッパ系白人」とされる人たちが持っている特権や無徴化された文化や規範、価値観を含む。Frankenberg は、ホワイトネス研究の観点から見た人種の認識について、(1) 人種の不認識、(2) 人種の違いの否定・回避、(3) 人種とその社会構造・権力についての再考、(4) 沈黙から言葉へ、(5) 言葉から行動へのプロセスがあると分析した。翻って、日本人性は、可視化されない社会的規範を形成し、構造的な特権を持つことを含意している（松尾 2005）。さらに戴 (2005) は、文化的差異の尊重や理解にとどまるのではなく、「日本人であること」がどのような社会的、文化的優位性を内包しているのかを問うことが重要であると指摘している。

これらの視点から異文化間能力について見てみると、他者の文化に対する敬意や寛容さ（態度）、文化的自己認識、他者の文化に対する理解（知識・理解）、観察する・分析する・関連付ける・批判的思考力（スキル）だけでなく、柔軟性、文化相対的視点やクリティカルな文化意識が重要である（Deardorff 2006; Byram 2009）。これに加え、自文化の透明性や、自分の中の偏見やステレオタイプ、特権性や優位性に気づき、他者と対等で水平的な関係を築くことも日本人性の観点から見た異文化間能力であるといえる。

3. 研究方法

本発表では、2013年度～2014年度に SEND プログラムに参加した 2 期生 33 名および 2015 年度～2016 年度に参加した 4 期生 34 名のうち、異文化間能力に関して記述が厚いと思われる学生計 14 名（2 期生 6 名、4 期生 8 名）がプログラム終了後に提出した報告書を中心に分析した。分析方法として、クレズウェル（2007）が示した質的研究の分析手順および佐藤（2008）のオープン・コーディング、焦点的コーディングを援用した。

4. 考察

4-1. 日本人性の視点から見た異文化間能力

①派遣先へのイメージの変化：学生は、派遣先の教員や学生との交流を通して、それまで抱いていた派遣先に対するイメージが変化した。また、アジアへの帰属意識に気づいたという学生もいた。【文化的自己認識】【関連付けるスキル】

②学習者の文化的背景への対応：タイの大学で実習を行った学生は、教科書で使用されている語彙の説明に含まれる文化的意味に気づき、それに対応させることができた。【クリティカルな文化意識】【文化相対的視点】【柔軟性】

③日本語母語話者教師としての特権性への気づき：中国の大学で実習を行った学生は、日本語を教える際、教師として、また日本語母語話者として持ち得る特権性について省察し、学習者と対等な関係を築こうとしていた。【特権性への気づき】

4-2. 日本人性の認識の段階

上記①～③は、Frankenberg が示した認識の段階で見ると、それまでの自分が当たり前に見えてきたことを見直しており、「社会構造・権力についての再考」の段階であるといえる。特に③は、日本語母語話者教師としての特権性や学習者との対等な関係を築くことの重要性にも触れている。その一方で、学生の中には異文化との共存や異文化環境での適応には否定的な記述も少数ではあるが見られた。これらは「違いの否定・回避」の段階であると考えられる。

海外日本語教師アシスタント実習において、参加学生の異文化間能力には、文化相対的視点やクリティカルな文化意識、特権性への気づきなど、日本人性の視点から見ても重要なものが見られた。また、日本人性の認識については、特権性やそれを生み出す社会構造には無自覚であることが多かったため、自分と異なる文化を持つ人と協働していくためには、このような視点も意識したプログラム作りが必要である。

引用文献

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社

戴エイカ（2005）『『多文化共生』と『日本人』—『文化』と『共生』の再検証』『異文化間教育』22、27-41 頁

松尾知明（2005）『『ホワイテネス研究』と『日本人性』—異文化間教育研究への新しい視座—』『異文化間教育』22、15-26 頁

Byram, Michael 著、細川英雄監修、山田悦子、吉村由美子訳、（2015）『相互文化的能力を育む外国語教育：グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店

Creswell, John, W 著、操華子・森岡崇訳（2007）『研究デザイン：質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会

Deardorff, Darla K. (2006). Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization. *Journal of Studies in International Education*. Vol. 10 No.3, 241-266.

Frankenberg, R. (1993). *White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

地域日本語教育が育む異文化間能力

—対話を通じて—

中川祐治（福島大学）

1. 地域日本語教育と異文化間能力

地域日本語教育は、「多言語多文化を背景とする住民を含めた地域社会形成のための、地域社会を基盤とした多面的重層的なシステム」（日本語教育学会編，2008: 13）であるとされ、また、「地域社会と密着し生活を基盤として日本語学習を位置づける社会型日本語教育」であって、「日本で暮らし、働く外国人の日本語学習を支援する活動は、大学や日本語学校で行われる学校型の日本語教育と区別」されるものであるといった指摘もある（日本語教育政策マスタープラン研究会，2010: 21）。

事実、実際の場合は、いわゆる日本語ボランティア教室という名称で、ボランティアの手によって行われるボランティアな市民活動であって、参加者が一定ではない、多くは1週間に1回、毎回2時間程度といった時間的制約がある、学期などの時間的区切りがないといった、非意図的、非計画的な営みであり、その性質は、いわゆる「教育」よりも「福祉」の領域にちかいものであるといえる。そこで育まれ育もうとする能力は「文脈や状況と切り離れた個人内に獲得・蓄積された知識や技能をとらえる静的で個体主義的な能力観ではなく、社会の具体的な状況において他者との関係性の中で発現する動的な能力」（日本語教育学会編，2008: 24）としてとらえるべきものであって、その能力を生かしながら「異なる言語文化背景を持つ者同士が関わりの中で共通に抱えている問題を解決していくことが必要であり」、「現実における問題を解決するためには、協力関係を作りその関係を維持して行くための知識やスキルが必要となる」（日本語教育学会編，2008: 25）だろう。

また、先行研究によると異文化間能力とは、たとえば、「個々の異文化的知識、技能、態度にもとづき、異文化的状況で効果的かつ適切にコミュニケーションをとる能力」「参照枠を適切に変更し、文化的コンテクストに行動を適応させる能力」（Deardorff, 2006）、「異文化環境下で仕事や勉学の目標を達成し、文化的・言語的背景の異なる人びとと好ましい関係をもち、個人にとって意味のある生活を可能にするための能力や資質」（山岸，1995）といったものがあげられているが、これらは地域日本語教育の場で育まれ育もうとする能力に重なるものであるいえよう。では、これらの能力を育むにはどのような方法が考えられるだろうか。Byram(2008)は「相互文化的出会いについての自分誌」を記し分析することの教育的有効性を主張する。日本語教育学会編(2009)においても、地域日本語教育における「評価」的視点の必要性に言及する中で、活動の記述・分析にもとづく自己評価の重要性を説く。いずれにしても、そこには自らをふり返り、省察する行為が要となる。

2. リサーチ・クエスチョン・研究方法

本発表では、地域日本語教育の参加者のうち支援者に着目し、リサーチ・クエスチョンとして「地域日本語教育の文脈において異文化間能力はどのように育まれるのか」を設定し、あわせて、地域の日本語支援者は、実践の中でどのような「暗黙知」「実践知」を用いているのか、自分自身の実践についての省察を通して、いかに実践を捉え直し、どのように実践をつくりかえることができるのかといった点についても言及する。実際の方法としては、5人の調査協力者に対してエピソード記述を依頼し、それにもとづくインタビューを行う。そのインタビューを言語データとしてSCAT法による分析を行い、ストーリーラインを描くことによって上記のリサーチ・クエスチョンに迫る。自らの実践についてふ

り返り、それを他者(発表者)に語ること、対話という相互行為を通じて引き出され、あるいは掘り出され、見出された能力を、地域日本語教育が育む異文化間能力として整理する。

3. 結果

今回の発表では、地域日本語教育における、狭義の場(学習の場)である日本語ボランティア教室ではなく、広義の場(協働の場)である地域社会における活動、具体的には、映画制作活動からのエピソード／インタビューから浮かび上がった A さんの「物語」についての報告を行う。

支援者 A さんは、留学生 O 君、K 君を誘い、映画製作の活動に共に参加する。極度の人見知りである O 君については、A さんはまさか参加するとは思っていなかったが、3 日間の活動の中で、最初は音響班で音響機器の操作を教えてもらい、さらに謎の外国人 O という役を与えられ、そこで周囲が驚くほどの熱演をする。O 君は、この映画製作活動の中で自分の居場所を見つけ、大きく変化する。その結果、A さんは、O 君に対するこれまでの認識を一変させる。他方、K 君は、日本語のレベルは O 君よりも高く、これまでも地域の活動に参加した経験があることから、A さんは安心していましたが、周囲に溶け込もうとせず、次第に居場所を失ってしまう。A さんは、ハラハラして何度も口出しをし、そこで自分の中に母親のような感情が芽生えていることに驚くが、自分自身の本来の業務、立場との間に齟齬が生じ、そのため、彼への対応をめぐって葛藤が生じることとなる。

以上の「物語」から、能力に関する知識、技能、態度に関わる諸要素を見出すことができた。さらに、これらの能力は、【ものづくりの知識】【地域社会の理解】【ファシリテーションスキル】【デザインする力】【役割の組み換え】【シチズンシップ】といった能力としてモデル化し、地域日本語教育の場に転用することが可能となる。

4. 考察・成果

以上を、本年度のテーマである「異文化間能力を生かす」という観点からみると、「生かす」という概念には、異文化間能力の概念をプログラムの PDCA に生かして活用するという側面と、異文化間能力の概念をふり返りや気づき、意味づけの視点として活用するという側面があると考えられるが、地域日本語教育の文脈では後者の視点がより重要となる。即ち、支援者がアプリアオリの、何らかの意図や目的をもって行う行為よりも、結果として立ち現れる影響や効果に着目する必要がある。しかしながら、大半の支援者は、それらに意識を向けることは少なく、それらは気づかれることのないまま、日々の活動の中に埋没する。本研究では、支援者との対話を通じて、それら埋没しかけた出会いや体験に気づきや発見をもたらし、解釈、関連づけを行うことによって、異文化間能力の観点から意味づけを行うことができた。またこれらは、地域日本語教育の場において、その環境下のもと相互行為的に育まれるものであり、さらに対話という省察的営みを通じてメタ的に、支援者と発表者の相互においても育まれる能力であると考えられる。

〔参考文献〕

日本語教育学会編(2008)『外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発—報告書—』／日本語教育学会編(2009)『外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発—報告書—』／日本語教育政策マスタープラン研究会(2010)『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』／ココ出版／山岸みどり(1995)「異文化間能力とその育成」渡辺文夫編著『異文化接触の心理学』川島書店／Byram, M. (2008) *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections*. Multilingual Matters. [細川英雄監修『相互文化的能力を育む外国語教育』大修館書店]／Deardorff, D. K. (2006) *Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization*. Journal of Studies in International Education 10(3), 241-266.

第 38 回大会企画 公開シンポジウム

主催：東北大学 共催：異文化間教育学会

日時：6 月 18 日（日）9:00-12:00

場所：東北大学川内キャンパス 文科系総合講義棟 204

東北大学 グローバルイニシアティブセミナー

国際共修

—留学生と国内学生の学びあいをデザインする—

世界規模で留学生の移動が活発化する中、多様な文化背景をもつ留学生と日本人学生が共に学ぶ「国際共修*」授業の実践・開発やカリキュラムの国際化への関心が高まっています。本学ではこれまでにキャンパスの国際化を戦略的に推進する中で、国際共修授業の実践に集中して取り組んできました。一方、国際共修の効果検証・体系的考察、学習成果を最大化する教授法の開発等についてはまだ課題も多く、制度のみならず、カリキュラムや授業の設計、つまり「デザイン」に焦点を当てた議論の深化が国内外の大学から求められています。

本セミナーでは、国際共修を含む“Internationalization at Home”の専門家を国内外から招聘し、海外と日本の事例を通して大学教育における国際共修の現状と課題、展望につき議論する機会を設け、学習効果を意識した国際共修のあり方を検討します。

*本シンポジウムでは、国際共修を「言語・文化背景の異なる学生同士が知的交流を通して互いを理解し、己を見直し、最終的に新しい価値観の創造を自己成長へとつなげる学習機会」と捉えます。

■ 基調講演（9:05～10:25）

『カリキュラムの国際化』理論と実践：ヨーロッパ諸国の取り組みから

Elsbeth Jones（リーズベケット大学 名誉教授 国際教育コンサルタント）

『カリキュラムの国際化』理論と実践：オーストラリアの先進的な取組

Craig Whitsed（マードック大学 上級講師）

■ 講演（10:25～11:05）

「日本の大学における国際共修の取組とその展開：異文化間教育の視点から」

堀江 未来（立命館大学 国際教育推進機構 教授）

「日本の大学における国際共修の取組とその展開：実践例と学習成果のアセスメント」

末松 和子（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授）

■ パネルディスカッション（11:15～11:55）

「国際共修授業をデザインする：授業計画・実践・評価のサイクルをどう確立するか」

※参加費無料、申込不要 どなたでもご参加頂けます。

※使用言語：英語・日本語（通訳サービスあり）

お問合せ先：東北大学 国際連携推進機構 (oii_office@grp.tohoku.ac.jp)

*本シンポジウムは以下の助成を受け実施します。

- ・ スーパーグローバル大学創成支援事業
- ・ 科学研究費 基盤研究（C）

「グローバル人材育成における国際共修：教授法の確立に向けて」（研究代表者：末松和子）

- ・ 東北大学高度教養教育開発推進事業

若手交流会

日時：平成 29 年 6 月 17 日（土）12:00～13:00

場所：東北大学川内キャンパス 文科系総合講義棟 212

悩める若手研究者はどのようなネットワークのもとでキャリアを形成してきたか —共に歩む仲間の獲得に向けて—

2017 年度異文化間教育学会では、若手交流委員会の第 3 回企画として「悩める若手研究者はどのようなネットワークのもとでキャリアを形成してきたか—共に歩む仲間の獲得に向けて—」と題して若手研究者の交流の場を設けます。自称「若手」の方なら、どなたでもご参加いただけます。昼食を取りながら自由な雰囲気交流できたらと考えています。奮ってご来場ください。
※昼食は各自ご持参ください。

■ テーマ

今回のテーマは、「悩める若手研究者はどのようなネットワークのもとでキャリアを形成してきたか—共に歩む仲間の獲得に向けて—」です。キャリア形成に影響を与えてきた人とのつながりや若手研究者同士のネットワークについてディスカッションを行います。第一部「パネルディスカッション」では、第 1 回・第 2 回若手交流企画において自身のキャリア形成に関する講演を行った 4 名の学会員(小松翠会員・南浦涼介会員・黄美蘭会員・近田由紀子会員) がパネリストとして登壇します。また、今回はコメンテーターには、仙台観光国際協会で、多文化社会を支えるコーディネーターに関する実践研究を展開している菊池哲佳会員をお迎えいたします。

第二部の「ネットワーキングランチ」では、グループトークを通して、若手研究者ならではの悩みや不安の共有や情報交換、ネットワーク作りの時間にします。自称？！若手研究者の皆さん、ふるってご参加ください。

■ パネリスト・コメンテーター

パネリスト

小松翠会員(お茶の水女子大学 グローバルリーダーシップ研究所 特任講師)

南浦涼介会員 (東京学芸大学)

黄美蘭会員 (首都大学東京 国際センター)

近田由紀子会員 (文部科学省国際教育課 外国人児童生徒等教育支援プロジェクトオフィサー)

コメンテーター

菊池哲佳会員 (仙台観光国際協会)

■ 企画・運営

野山広 常任理事 (国立国語研究所)

小松翠 会員 (お茶の水女子大学 グローバルリーダーシップ研究所)

南浦涼介 会員 (東京学芸大学)

文吉英 会員 (東京福祉大学国際交流センター 基礎教育特任助教)

発表について

研究発表は、以下の種別で行なわれます。発表者、題目、時間帯、会場などの詳細は、それぞれの部会のページをご覧ください。

個人発表

共同発表

ケース／パネル発表

ポスターセッション

■ 発表要領

1. 発表時間（交代時間を含む）

A. 個人発表 30 分（発表 20 分、質疑応答 10 分）

B. 共同発表 60 分（発表 40 分、質疑応答 20 分）

※個人発表、共同発表共、発表者は自分の発表後、次の発表の司会を担当して頂きますので、必ずその教室の次の発表まで在室してください。1 番目の発表については、同枠の最後の発表者が司会を担当してください。

C. ケース／パネル発表 90 分（発表 50 分、質疑応答 40 分）

※会場での運営は、各グループでお願いいたします。

参加者による質疑応答の時間を確保するようご配慮ください。

D. ポスターセッション 6 月 17 日（土）14:00-17:00（在席時間：14:00-15:00）

※上記の時間帯は持ち場を離れないでください。会場は 12:00 からご準備いただけます。翌日の 18 日（日）14:30 まで掲示しておいて下さい。

6 月 18 日（日）9:00-14:30

※在席時間はありませので、必ずしも持ち場に在る必要はありません。

14:30 にポスターを撤去して下さい。2 日目に会場にいない方に関しては、大会準備委員会に事前にご相談下さい。15:00 までに撤去されないポスターに関しては、事務局の方で処分致します。

ポスターパネルのサイズは横 120cm×縦 170cm です。その範囲内でご準備下さい。

2. 配布資料

- ・ハンドアウトを配布される方は、1 発表につき 50 部程度ご用意ください。なお、大会準備委員会では印刷を受けすることはできませんことを予めご了承ください。
- ・停電などにより PC が使用できない場合にお備えください。

3. 使用機器

- ・発表を申し込まれた方には、別途機材などに関するご案内をお送りいたします。
- ・会場校にて各教室に PC とプロジェクタを用意しますが、万一接続などの問題が発生した場合に備え、ご自身のノート PC もお持ちください。Mac の場合はアダプタもご用意ください。発表ファイルの PC へのダウンロード、動作確認は、17 日（土）14:00～14:30、18 日（日）12:00～12:30 に行ってください。
- ・機材の操作は発表者ご自身で行ってください。
- ・インターネット接続は、eduroam がご使用になれます。

4. 発表者欠席の場合

- ・やむを得ない事情により発表者が欠席する場合には、できるだけ前日までに大会準備委員会にお知らせください。**※第 38 回大会準備委員会 e-mail: ibunkakan38@gmail.com**
- ・発表取りやめがあっても、プログラムの繰り上げはいたしません。

異文化間教育学会「優秀発表賞」について

異文化間教育学会では、異文化間教育学の発展を期して、会員の研究発表を奨励し、研究発表の向上を図ることを目的として、「優秀発表賞」を設けています。この賞は、若手の研究者を対象に、当該大会における「個人研究の個人発表」の中から、優秀と評価された発表に与えられるものです。

すでに大会 HP 等でも示してあるとおり、優秀発表賞の審査を受けるためには、発表者自身が受賞資格の条件（注）のいずれかに該当することを申告し、審査対象となる意思を表明する必要があります。

審査方法については、エントリーされた発表ごとに2名の評価者（研究委員会により委嘱）が会場で評価します。選考方法については、学会 HP に掲載してある選考手続きおよび規定に基づき、別途、優秀発表賞審査委員会を設置します。その後、本賞は審査委員会による選考が行われ、理事会の承認を得て決定されます。

「優秀発表賞」の実施にあたり、どうぞ大会参加会員各位のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（注）発表者が応募時に以下のいずれかに該当する場合、受賞資格を有するものとする。

- ・大学院修士課程もしくは大学院博士課程に在学中である
- ・修士課程修了後10年以内である

（複数の修士課程を修了した場合は、最後に修了した修士課程が対象）

- ・最終学歴が学部卒業の場合は、卒業後12年以内である

修了後の期間は、卒業・修了月の末日を終了日として起算する。例えば、大学院修士課程修了者で、3月修了の場合は、3月31日を修了月として、10年後の3月31日までが受賞資格を有する期間とする。

異文化間教育学会
理事長 加賀美常美代

研究発表プログラム

個人発表

6月17日（土）	15:00-17:00	文科系総合講義棟	1階	105
		文科系総合講義棟	2階	211、212、213
		中講義棟	2階	法学部第3講義室 経済学部第3講義室 文学部第1講義室
6月18日（日）	13:00-15:00	文科系総合講義棟	1階	105
		文科系総合講義棟	2階	212、213
		中講義棟	2階	法学部第3講義室 経済学部第3講義室 文学部第1講義室 文学部第2講義室

共同発表

6月17日（土）	15:00-17:00	文科系総合講義棟	2階	201、202、203、204
		中講義棟	2階	文学部第2講義室

ケース/パネル発表

6月18日（日）	13:00-14:30	文科系総合講義棟	2階	201、211
----------	-------------	----------	----	---------

ポスターセッション

6月17日（土）	14:00-17:00	文科系総合講義棟	1階	ホール
		在席時間 14:00-15:00		
6月18日（日）	9:00-14:30	文科系総合講義棟	1階	ホール

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表

105

6月17日

司会：加賀美常美代（お茶の水女子大学）

15:00—15:30 移住者に対する第二言語教育における隠れたカリキュラムと課題提起型第二言語識字教育の可能性：韓国移住女性人権センターの取り組みを踏まえて

藤田 美佳（奈良教育大学）

15:30—16:00 「文法を重視する」という教師の日本語教育の考え方はどのように作り出されているのか—言語教育のローカル化の視点から—

瀬尾 匡輝（茨城大学）

16:00—16:30 移民的背景をもつ人々が学ぶ日本語学習の内容の検討
—異文化的背景を配慮したドイツの統合コースの教科書を参考に—

足立 祐子（新潟大学グローバル教育センター）

16:30—17:00 日本語を第二言語とする子どもたちを対象とした教科書リライトの二つの方向性と検討課題

鎌田 美千子（宇都宮大学）

個人発表

211

6月17日

司会：久保田真弓（関西大学）

15:00—15:30 日本人学生と留学生の協同学習による多言語ニュアンスの理解
—『星の王子さま』の多言語バージョンの読解を通じて—

李 曉燕（九州大学大学院比較社会文化研究院）

15:30—16:00 異文化間協働学習による留学生と日本人学生の心理的変容
—国際共修における「接触理論」の可能性—

西岡 麻衣子（関西大学大学院外国語教育学研究科）

16:00—16:30 プロジェクト型「国際共修」における学生の異文化理解への意識と行動の変容
—仙台市の国際化推進プロジェクトを事例として—

水松 巳奈（東北大学）

16:30—17:00 ノルウェーにおける独立心概念の表れ方—グローバル人材への示唆を得るために—

鈴木 京子（首都大学東京国際センター）

個人発表

212

6月17日

司会：塘利枝子（同志社女子大学）

15:00—15:30

日系国際児の進路選択 ―ある大学生のライフストーリーを事例として―

小林 美文（立教大学）

15:30—16:00

国際結婚したフィリピン人母はいかにして日本社会・文化へ適応していったか
―新たな適応プロセス・モデル構築の試み―

浅井 直子（明星大学通信制大学院教育学研究科教育学専攻 博士後期課程）

16:00—16:30

在韓日本人母の縦断的言語使用調査―子どもへ母語を使用しない母を中心に―

花井 理香（関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科）

16:30—17:00

移住定住者の心理適応とその課題を把握するための実証研究
～心理臨床的視点から捉えたとっとり創生～

藤田 恵津子（公立鳥取環境大学）

個人発表

213

6月17日

司会：工藤和宏（獨協大学）

15:00—15:30

対話による自己理解を目指した実践と効果
―ヒューマンライブラリーにおける「本」の語りから―

菅原 早紀（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科）

15:30—16:00

繰り返し参加する「本」の動機に関する考察
―ヒューマンライブラリーNagasakiの事例から―

宮崎 聖乃（長崎外国語大学 外国語学部国際コミュニケーション学科）

16:00—16:30

ヒューマンライブラリーを読み解く―対話世界の構築と視界の相互性―

坪井 健（駒澤大学文学部社会学科）

16:30—17:00

ヒューマンライブラリーの効果～「読者」アンケートを中心として～

横田 雅弘（明治大学国際日本学部）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表

経済学部第3講義室

6月17日

司会：見世千賀子（東京学芸大学）

15:00—15:30

混住寮におけるレジデント・アシスタントの成長プロセス
 —複線径路等至性アプローチによる類型化—

吉田 千春（明治大学大学院 国際日本学研究所）

15:30—16:00

インタビュー活動を通じた社会参加
 ：国際文化フォーラム「ときめき取材記」の実践研究

三代 純平（武蔵野美術大学）

16:00—16:30

グローバルな地域社会を支える学びの形成
 —「やさしい日本語」を通して見えてきたこと—

秋元 みどり（上智大学）

16:30—17:00

「多文化共生」の課題解決に向けたコミュニケーションに関する一考察
 ：地域の事例に基づいて

金 明美（静岡大学情報学部情報社会学科）

個人発表

文学部第1講義室

6月17日

司会：野山広（国立国語研究所）

15:00—15:30

ビデオレター交流を取り入れた母語教育
 —日本にルーツを持つ韓国の子どもたちと日本人大学生の学び—

高橋 朋子（近畿大学日本語教育センター）

15:30—16:00

異文化間で効果的に活躍できる人材育成をめざして
 —オンラインによる日米協働型の日本文化授業 COIL の試み—

小玉 安恵（California State University San Jose）

16:00—16:30

文化の重層性を体感させる「日本事情」の試み
 —日本国内における留学生教育を対象として—

藤 美帆（広島修道大学）

16:30—17:00

ユネスコの地球市民教育における多元的アイデンティティ形成の課題
 —アイデンティティ教育の新たな展望—

小林 亮（玉川大学教育学部）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表

法学部第3講義室

6月17日

司会：川崎誠司（東京学芸大学）

- 15:00—15:30 在日ブラジル人の教育 — 進学と日本社会での自立
田中 真奈美（東京未来大学モチベーション行動科学部）
- 15:30—16:00 イタリアのS幼児学校における異文化間教育
—「～にとって大事なもの」への配慮を養う
高橋 春菜（盛岡大学）
- 16:00—16:30 排除と共生の日常を物語ることから始める異文化間教育の意義
—ドイツの青少年の現実に向き合って—
伊藤 亜希子（福岡大学人文学部）
- 16:30—17:00 国際感覚を育む授業研究実践と課題—ジャカルタ日本人学校の一事例—
奥田 麻衣子（広島大学大学院国際協力研究科）

個人発表

105

6月18日

司会：坪井健（駒澤大学）

- 13:00—13:30 「東京にしがわ大学」の生涯学習からみたヒューマンライブラリー
—ヒューマンライブラリー講座を事例として—
松本 健（元駒澤大学大学院）
- 13:30—14:00 全学的取り組みとしてのヒューマンライブラリー実践報告～多文化共修科目の取
組みとも合わせて
岡 智之（東京学芸大学留学生センター）
- 14:00—14:30 ゼミプロジェクトヒューマンライブラリー
：異文化理解のためのさらなる活動について考える
山下 美樹（麗澤大学）
- 14:30—15:00 ヒューマンライブラリーの多様化とアフォーダンス
～「他者」との対話の効果はどこにあるのか～
工藤 和宏（獨協大学外国語学部）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表

212

6月18日

司会：白土悟（九州大学）

13:00—13:30 留学生観光サポーター養成の試み

阿部 祐子（国際教養大学国際教養学部）

13:30—14:00 在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク再考—福岡都市圏を中心に—

呉 暁良（九州大学大学院地球社会統合科学府）

14:00—14:30 日本における外国人留学生の就職活動に関するインタビュー調査

坂井 伸彰（名古屋大学国際教育交流センター）

14:30—15:00 移動する看護人材の言語能力とキャリア形成

嶋 ちはる（国際教養大学）

個人発表

213

6月18日

司会：渋谷真樹（奈良教育大学）

13:30—14:00 教育の「リスク」と異文化間教育の実践：ガート・ビースタの教育論に着目して

齋藤 眞宏（旭川大学）

14:00—14:30 高校SGHにおける異文化間能力育成：文化間移動をする生徒と共に

下島 泰子（東京学芸大学大学院連合 学校教育学研究科）

14:30—15:00 一条校における国際バカロレア教育に関する一考察

時任 隼平（関西学院大学高等教育推進センター）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表

経済学部第3講義室

6月18日

司会：岡村郁子（首都大学東京）

13:00—13:30 大垣市きらきら教室5年間の成果に基づく就学前プレスクールの意義に関する考察
内田 千春（東洋大学）

13:30—14:00 多言語教育地域における外国籍児童のアイデンティティ
ーバスク自治州の小学校教育に関する事例研究ー
ビジャモール・エレロ エフライン（山口県立大学大学院 国際文化学研究科）

14:00—14:30 日本人（元）高校生のアイデンティティ交渉における空間と言語の役割
小林 聡子（千葉大学）

14:30—15:00 低年齢で帰国した児童の第二言語能力 ーリテラシーの観点からー
谷口 ジョイ（静岡英和学院大学）

個人発表

文学部第1講義室

6月18日

司会：中川祐治（福島大学）

13:00—13:30 日越ビジネスコミュニケーションにおける不安と失敗の捉え方の変容
西谷 まり（一橋大学国際教育センター）

13:30—14:00 日米間コミュニケーションについての考察ー「建前」の二重概念を起点にしてー
中村 義実（新潟県立看護大学）

14:00—14:30 「ピジン」と「同文語族」ー神戸中華同文学学校の事例からー
Yuan.馬場 裕子（立命館大学大学院）

14:30—15:00 言語・非言語コミュニケーション再考ー恣意性に基づく記号からー
久保田 真弓（関西大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表

文学部第2講義室

6月18日

司会：小柳志津（首都大学東京）

13:00—13:30 批判的社会理論以降の多文化教育—その課題と可能性—

住野 満稲子（東京大学大学院教育学研究科）

13:30—14:00 工業系大学における「グローバル人材」育成をめぐる葛藤：学生・教師の語りから

加藤 鈴子（九州工業大学 学習教育センター）

14:00—14:30 多文化共生をめざす教師教育カリキュラムのデザイン
—多様性と社会的正義に対するスタンスの形成という観点から—

金井 香里（武蔵大学人文学部）

14:30—15:00 異文化協働プログラムの両義性と境界線越え

村田 晶子（法政大学）

個人発表

法学部第3講義室

6月18日

司会：森茂岳雄（中央大学）

13:00—13:30 多文化教育論実践報告—アリゾナ州、ニューメキシコ州、テキサス州にて—

佐々木 明子（宇都宮大学）

13:30—14:00 大学生が語る ESL と異文化教育 - 異文化適応としての語学教育の在り方

大味 潤（尚美学園大学総合政策学部・芸術情報学部）

14:00—14:30 海外研修プログラム参加者の追跡調査—グローバル人材教育の視点から—

阿部 恵（（独）国立高等専門学校機構 八戸工業高等専門学校）

14:30—15:00 留学とその効果：公立大学の事例から

桑村 昭（愛知県立大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

共同発表

201

6月17日

司会：吉谷武志（東京学芸大学）

15:00—16:00 現職教員の「日本語指導」に関する認識—「多文化教員研修」の検討に向けて—

河野 俊之 （横浜国立大学教育学部）
金田 智子 （学習院大学文学部日本語日本文学科）
川口 直巳 （愛知教育大学教育学部現代学芸課程日本語教育コース）
齋藤 ひろみ （東京学芸大学）
橋本 ゆかり （横浜国立大学教育人間科学部）
浜田 麻里 （京都教育大学教育学部）
南浦 涼介 （東京学芸大学）

16:00—17:00 多文化の若者によるエンパワメントと居場所づくり
：定時制高校におけるクラブ活動の実践

徳永 智子 （慶應義塾大学）
角田 仁 （東京都立一橋高等学校）

共同発表

202

6月17日

司会：原裕視（目白大学）

15:00—16:00 ニューカマーと貧困のエスノグラフィー
—生活保護・生活困窮家庭の子ども支援を通して—

坪田 光平 （職業能力開発総合大学校）
チュープ サラーン （日本大学大学院人文科学研究所）
宮脇 英理 （日本女子大学 人間社会研究科 教育学専攻）

16:00—17:00 エスニックレストランから見る外国人集住都市の成り立ち
—韓国安山市多文化通りのインドネシア料理店の調査を通して見えるもの—

吹原 豊 （福岡女子大学）
松崎 真日 （福岡大学）
磯野 英治 （名古屋商科大学）
助川 泰彦 （首都大学東京 国際センター）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

共同発表

203

6月17日

司会：徳井厚子（信州大学）

15:00—16:00 混合クラスにおける機能的多文化小集団の形成

秦 喜美恵 （立命館アジア太平洋大学教育開発・学修支援センター）

中野 祥子 （山口大学留学生センター）

田中 共子 （岡山大学社会文化科学研究科）

16:00—17:00 国際交流から協働性へ

：国際協働学習授業グローバル・スタディ・プログラムを事例に

小林 聡子 （千葉大学）

ガイタニディス ヤニス （千葉大学国際教養学部）

共同発表

204

6月17日

司会：松尾知明（法政大学）

15:00—16:00 大学英語科目開講（EMI）における多言語使用

湯川 笑子 （立命館大学文学部）

堀江 未来 （立命館大学国際教育推進機構）

16:00—17:00 大学生の「グローバルな能力」獲得についてー3タイプの国際経験による比較

岡村 郁子 （首都大学東京）

額賀 美紗子 （東京大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

共同発表

文学部第2講義室

6月17日

司会：馬渕仁（大阪女学院大学）

**15:00—16:00 中学生対象の海外研修参加者に見られる教育的効果に関する研究
：生徒の自己成長と意識変化を中心に**

平井 華代 （岩手大学グローバル教育センター）

阿部 恵 （(独)国立高等専門学校機構 八戸工業高等専門学校）

尾中 夏美 （岩手大学グローバル教育センター）

16:00—17:00 留学生対象日本語授業への参加がもたらす日本人学生の気づき

齊藤 美穂 （神戸大学）

黒田 千晴 （神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

ポスター発表 文科系総合講義棟 1 階ホール 6 月 17 日 : 14 : 00 ~ 17 : 00

6 月 18 日 : 09 : 00 ~ 14 : 30

発表者は、1 日目の在席時間（14:00-15:00）には必ず在席してください。

1 日目 15:00-17:00、2 日目 9:00-14:30 については、任意の在席となります。

1. 多文化的キャンパス風土の構築に向けた研究

—大学院留学生に知覚される日本の大学のキャンパス風土—

大西 晶子 （東京大学国際センター本郷オフィス）

2. 大学のグローバル化と改革の中で留学生アドバイジングについて考える

有川 友子 （大阪大学国際教育交流センター）

3. 中国人編入留学生のキャリア形成に関するライフストーリー研究

—トランジションと行為能力（agency）に着目して—

久野 弓枝 （札幌大学地域共創学群）

4. 台湾人元留学生の職場における存在意義と職場の持つ意味

守谷 智美 （岡山大学）

池田 聖子 （お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻）

和田 薫子 （お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

加賀美 常美代 （お茶の水女子大学基幹研究院）

5. 多文化就労場面における葛藤解決方略と労働価値観、外国人社員への就労意識の関連

加賀美 常美代 （お茶の水女子大学基幹研究院）

小松 翠 （お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所）

黄 美蘭 （首都大学東京 国際センター）

岡村 佳代 （聖学院大学）

6. 中国人男子私費留学生のアルバイト経験とキャリア意識

黄 美蘭 （首都大学東京 国際センター）

7. 協働作業を通じて学ぶ出身・所属・世代の多文化性

尾中 夏美 (岩手大学グローバル教育センター)

松岡 洋子 (岩手大学グローバル教育センター)

8. 多文化共生保育における保育者の役割ーフィンランドにおける母国語保持尊重ー

石塚 麻衣 (聖心女子大学大学院)

9. 地域の拠点と人を横断する子育てネットワーキングにおける「学習」の実践

ーカナダの日本語背景の子どもを持つ母親の聞き取り調査からー

秋山 幸 (早稲田大学大学院 日本語教育研究科)

石井 恵理子 (東京女子大学現代教養学部人間科学科言語科学専攻)

10. 「日本語」とアジアをつなぐグローバル・シティズンシップ教育の試み

永岡 悦子 (流通経済大学流通情報学部)

11. ソーシャルコミュニケーションスキル向上を目的とした共修授業の内容について

池田 英喜 (新潟大学グローバル教育センター)

足立 祐子 (新潟大学グローバル教育センター)

12. 日本人学生を対象とした多文化共生対応スキル養成プログラムの実践

ー「やさしい日本語」を用いた多文化共生対応のための言語スキルの養成ー

柳田 直美 (一橋大学国際教育センター)

13. 日本人学生を対象としたムスリム留学生との異文化交流のための異文化間教育

: 文化摩擦場面のロールプレイから異文化間ソーシャルスキルへ

中野 祥子 (山口大学留学生センター)

田中 共子 (岡山大学社会文化科学研究科)

14. 多言語背景をもつ年少者のための小学校理科日本語語彙テスト開発に向けた語彙の選定

ー小学校教員による語の重要度の判定の結果についてー

関 裕子 (筑波大学)

15. 日本生育外国人児童の小学校低学年におけるリテラシーの発達**—日本語による意見文作文の「理由」に着目して—**

齋藤 ひろみ (東京学芸大学)

菅原 雅枝 (東京学芸大学 国際教育センター)

三好 大 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程)

李 佳耀 (東京学芸大学大学院教育学研究科)

16. 外国人児童への日本語の取り出し指導における「読書活動」**—読みと書きを関連付けた活動の試み—**

三好 大 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程)

17. 外国人児童生徒支援に関する勉強会から見られる学生達の学びの様子**—将来自ら支援できる保育者、教員を目指して—**

川口 直巳 (愛知教育大学教育学部現代学芸課程日本語教育コース)

鈴木 絵莉 (愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルーム)

遊佐 美和子 (愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルーム)

夏目 礼子 (愛知教育大学)

18. 外国人生徒の進路をめぐる「家族の教育戦略」**—中国にルーツを持つ生徒の保護者へのインタビューから—**

李 佳耀 (東京学芸大学大学院教育学研究科)

19. 日本人大学生の海外経験における異文化間コンフリクト**—アサーション・トレーニングの教材作成の試み—**

園田 智子 (群馬大学国際教育・研究センター)

20. 留学生と「死」を共有する実践—デス・エデュケーションの可能性—

萩原 秀樹 (インターカルト日本語学校)

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

ケース／パネル発表

201

6月18日

13:00—14:30 国際児研究の最前線 ―心理的問題を中心に

共同発表者,司会者	鈴木 一代	(埼玉学園大学人間学部)
共同発表者	下川 政洋	(国際医療福祉大学)
共同発表者	瀧浪 貴夢	(国際医療福祉大学大学院)
共同発表者	津田 友理香	(四谷ゆいクリニック)
ディスカッサント	小林 亮	(玉川大学教育学部)
ディスカッサント	佐野 秀樹	(東京学芸大学教育学部教育心理学講座)

ケース／パネル発表

211

6月18日

13:00—14:30 日・韓における国際結婚移住女性の日常生活に関する比較考察
 ―女性たちの日常的「実践」や「言語生活」に注目して―

共同発表者,司会者	野山 広	(国立国語研究所日本語教育研究領域)
共同発表者	具 美善	(一橋大学大学院言語社会研究科)
ディスカッサント	藤田 美佳	(奈良教育大学)

= 外国人留学生募集広報ポータルサイト =

JAPAN STUDY SUPPORT

Information for foreign students



日本留学ポータルサイト『JAPAN STUDY SUPPORT』の特徴

▶ サイトの集客力が強力なのはもちろん、SNSを活用したPUSH型の広報も可能！

キーワード検索ヒット状況	Google	YAHOO!
「日本 留学」	1位 / 4,950,000件	1位 / 4,950,000件
「japan study」	1位 / 7,240,000件	1位 / 7,200,000件

※2015年8月時点

● 世界中の日本留学希望者が検索するキーワードで上位にヒットするポータルサイト。

● 年間訪問者数は、約62万人。総PV数約380万件。(※2015年度)

● JPSS公式Facebookページの「いいね！」件数は、圧倒的な101万件！

▶ 英語圏、アジア、ASEAN諸国中心に、広く海外にアプローチが可能な多言語対応！

● 8言語(日本語/英語/簡体字/繁体字/韓国語/タイ語/ベトナム語/インドネシア語)に対応しており、近年では特にASEAN諸国からのアクセスが急増しております。

▶ 文部科学省・JASSOから推奨サイトとして紹介！



日本留学フェア配布資料「STUDENTS GUIDE TO JAPAN」より抜粋

▶ サイトの認知拡大活動が強力！「国内外の日本語学校」と「日本留学フェア」への認知活動！

● JPSS活用ガイドブックは、「国内外の日本語学校」「海外の日本留学フェア」にて、年間6万部を配布！



JPSS参加校一覧が掲載されるJPSSガイドブック



JPSSとして、海外の日本留学フェアに参加。JPSS参加校に、学生をご案内する活動を実施しております。

* 外国人留学生の受け入れ・募集広報に関する情報提供/学内勉強会のご依頼/お問い合わせはこちらまで

株式会社ベネッセコーポレーション 高大接続課

TEL : 0120-369740(通話料無料)、月曜日～金曜日、10:00～20:00(祝日、年末年始を除く)

グローバル教育の内容編成に関する研究

藤原 孝章著 8500円
総合的な領域をもつグローバル教育についての日米英の
カリキュラムを検証し、教科融合・教科統合・教科超越の
視点から内容編成を分析。理論と実践を論じた力作。

教員の異文化体験 —異文化適応・人間的成長・
教員としての成長—

鈴木 京子著 9000円
日本からの教員海外派遣プログラムで海外に滞在した
経験を持つ教員を対象に質的調査を実施。異文化接触による
人間的成長と教員としての成長について明らかにする。

イギリス絵本留学滞在記

正置 友子著 2000円
54歳で英国へ旅立つ。6年間の留学生活の後、ヴィクトリア
時代の絵本研究により博士号を授与された著者の記録。
現地での生活、学びの日々、友人達との出会いを綴る。

感情心理学からの文化接触研究

小柳 志津著 9500円
異文化対人接触ではなぜ文化の違いが問題を引き起こす
のか？ 本書は、コンテキストでの関係性が文化規範への
評価や感情の質を決めることを明らかにした好著。

異文化間コミュニケーションにおける相互作用管理方略

佐々木由美著 14000円
文化スキーマ理論に基づき、各文化で獲得した方略スキーマ
により、特定の相互作用の方略を選択することについて、
実証的検証を試みた研究である。

まど・みちお 詩と童謡の表現世界

張 晟 喜著 2800円
童謡〈ぞうさん〉の作詞者まど・みちおの創作の軌跡を
辿り、104年の生涯を貫いた詩と童謡の表現世界を探究。
作品の分析でまどが感じ取った時空間を解き明かす。

中国、ベトナム進出日系企業における異文化間コミュニケーション考察

西田ひろ子編著 8500円
中国、ベトナム進出日系企業で働く日本人と中国人・
ベトナム人管理職の異文化間コミュニケーション行動に
ついて、認知科学的視点から分析・考察を行う。

アメリカで生きた女性たち

浅井正行・浅井直子著 2500円
戦後、国際結婚によって米国に渡った日本人女性の言語的・
文化的障壁との戦いと、それを克服していったたゆまぬ
努力の足跡をたどる。10人のオーラルヒストリー。

異文化接触における民族アイデンティティの役割

植松 晃子著 6500円
異文化環境での「アイデンティティ」を再考。異文化接触に
よるインパクトと心の影響について解明し、日本人留学生
への心理的サポートのあり方について考察した。

国際結婚の家族心理学 —日米夫婦の
場合—

矢吹 理恵著 5500円
夫アメリカ人・妻日本人の夫婦を対象に、家庭で構築された
文化の諸相と心理的な変容過程を分析。多くの事例から
国際結婚家族の現状が鮮明に浮かび上がる。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
TEL 03-3291-5729 FAX 03-3291-5757

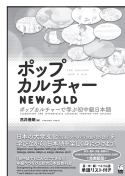
風 間 書 房

(URL) <http://www.kazamashobo.co.jp>
メールアドレス pub@kazamashobo.co.jp

くろしお出版

ポップカルチャーNEW&OLD

ポップカルチャーで学ぶ初中級日本語
■ 花井善朗 [著] / ¥2,000+税
漫画や歌、踊りなど、江戸時代～現代の日本のポッ
プカルチャー（大衆文化）を学びながら日本語を楽
しく身につける初中級総合教材。



公共日本語教育学

社会をつくる日本語教育
■ 川上郁雄 [編] / ¥2,600+税 (予価)
人とことばと社会を視点に、どのような社会を築け
るか。日本語教育を通じて探究していく実践の学。

NOW
PRINTING

国際化時代の日本語を考える

二表記社会への展望
■ J・マーシャル・アンガー/茅島篤/高取由紀 [編]
/ ¥3,700+税
日本語表記を外国人にも開かれたものにするため
に、漢字かな交じり表記に加えローマ字表記を併用
する可能性・必要性を多角的に考察。



コミュニケーションを梓づける

参与・関与の不均衡と多様性
■ 片岡邦好・池田佳子・秦かおり [編] / ¥3,700+税
人が集まる場所には参与梓組み（やりとりの梓組
み）が生まれ、変化し、移行する。その機微を紐解
き、従来の定義を再考する試み。



リテラシーズ叢書6

市民性形成とことばの教育

母語・第二言語・外国語を超えて
■ 細川英雄/尾辻恵美/マルチェッラ・マリオッティ [編]
/ ¥2,800+税
人がことばを使って社会の中で生きていくことの意
味を追求。



日本語教師のためのCEFR

■ 奥村三菜子・櫻井直子・鈴木裕子 [編]
/ ¥2,000+税
CEFR（外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッ
パ共通参照枠）の理論をQ&Aで紹介する第一部
と、実践例を紹介した第二部から成る入門書。



多文化間共修

—多様な文化背景をもつ
大学生の学び合いを支援する

坂本利子・堀江未来・米澤由香子 編著

本体
1900円
224頁



大学の国際化と 日本人学生の国際志向性

横田雅弘・小林明 編著

本体
2300円
216頁



「ESDでひらく未来」シリーズ

持続可能な地域と学校の ための学習社会文化論

降旗信一 編著

本体
1900円
160頁



SDGsと開発教育

—持続可能な開発目標のための学び

田中治彦・三宅隆史・湯本浩之 編著

本体
3000円
304頁



持続可能な未来のための教職論

諏訪哲郎 監修

降旗信一・小玉敏也 編著 ●本体2000円 192頁

〈多文化共生〉8つの質問

—子どもたちが豊かに生きる2050年の日本

佐藤友則 著 ●本体2000円 176頁

途上国における基礎教育支援

上巻 一国際的潮流と日本の援助

小川啓一・西村幹子 編著 262頁 本体2800円

下巻 一国際的なアプローチと実践

廣里恭史・北村友人 編著 270頁 本体2800円



教育課程・方法論

—コンピテンシーを育てる授業デザイン

松尾知明 著

●本体2300円 224頁

学校学力から生涯学力へ

前田耕司・佐藤千津 編著

●本体1700円 160頁

早稲田教育叢書 34

基礎から学ぶ比較教育学

長島啓記 編著

●本体2300円 242頁

生涯学習と多文化・多民族教育の研究

岩崎正吾 編著

●本体1800円 160頁

〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-6-1
http://www.gakubunsha.com

学文社

Tel 03-3715-1501(代) Fax 03-3715-2012
E-mail: eigyo@gakubunsha.com

外国人の子ども白書

権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から
荒牧重人・榎井縁・江原裕美・小島祥美・志水宏吉・
南野奈津子・宮島喬・山野良一 編 ●2500円

現代日本における「外国につながる子ども」の現状と支援の
課題が一冊でわかる画期的な白書。人権、福祉、教育、
文化（言語）、家族、滞在条件などの観点から、外国人
の子どもの現状を正確に把握、データおよび支援現場の報
告からそのリアルな姿が見えてくる。



異文化間を移動する子どもたち

帰国生の特性とキャリア意識

岡村郁子 著

●5200円

異文化間を移動する子どもたち、とりわけ「帰国生」を取り
巻く環境の変遷を概観するとともに、帰国中・高・大学生
への調査結果を検証。異文化体験を通じて得た特性、異
文化体験活用に対する意識とキャリアに対する考え方など帰
国生の「今」を明らかにする。



移住者と難民のメンタルヘルス

移動する人の文化精神医学

ディネッシュ・ブグラ、スシャム・グプタ 編

野田文隆 監訳 李創鎬、大塚公一郎、鵜川晃 訳

●5000円

全世界で激増する「移動する人」のメンタルヘルス支援のニーズ
に応えるべく、ブグラ世界精神医学会理事らにより編集されたラ
ンドマーク的な一冊。



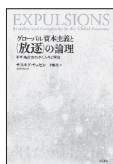
グローバル資本主義と〈放逐〉の論理

不可視化されゆく人々と空間

サスキア・サッセン 著 伊藤茂 訳

●3800円

「おきざりにされた人々」が各国政治情勢を揺るがすなか、その背
景に潜む支配的論理を実証的・概念的に可視化しようと試みる現
代社会への警鐘の書。



難民を知るための基礎知識

政治と人権の葛藤を越えて 滝澤三郎、山田満 編著

●2500円

自治体がひらく日本の移民政策

人口減少時代の多文化共生への挑戦 毛受敏浩 編著

●2400円

対話で育む多文化共生入門

ちがいを楽しみ、ともに生きる社会をめざして 倉八順子 著 ●2200円

新たな時代のESD サステナブルな学校を創ろう

世界のホールスクールから学ぶ

永田佳之 編著・監訳 曾我幸代 編著・訳

●2500円

ヨーロッパにおける移民第二世代の学校適応

スーパー・ダイバーシティへの教育人類学的アプローチ 山本須美子 編著 ●3600円

東アジアの多文化共生

過去／現在との対話からみる共生社会の理念と実態 権寧俊 編著 ●2800円

オーストラリアの学校外保育と親のケア

保育園・学童保育・中高生の放課後施設 白田明子 著 ●3500円

21世紀のICT学習環境

生徒・コンピュータ・学習を結び付ける

経済協力開発機構(OECD) 編著 国立教育政策研究所 監訳

●3700円

「開かれた学校」の功罪

ボランティアの参入と子どもの排除／包摂 武井哲郎 著 ●3800円

経験資本と学習 首都圏大学生949人の大規模調査結果

岩崎久美子、下村英雄、柳澤文敬、伊藤素江、村田維沙、堀一輝 著 ●3700円

アートの教育学 革新型社会を拓く学びの技

OECD教育研究革新センター 編著 篠原康正、篠原真子、裴岩晶 訳 ●3700円

批判的教育学事典

マイケル・W・アップル、ウェイン・アウ、ルイ・アルマンド・ガンディン 編

長尾彰夫、澤田稔 監訳

●25000円

明石書店

〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5 TEL.03-5818-1171
http://www.akashi.co.jp 振替00100-7-24505

FAX.03-5818-1174
*目録送呈 *価格税別

基礎から分かる会話 コミュニケーションの分析法

高梨克也 著
様々な会話コミュニケーションを理論
的・体系的に分析するために。2400円

話し合いトレーニング

◎伝える力・聴く力・問う力を育てる自
律型対話入門 大塚裕子・森本郁代 編著
大学での授業実践から生まれた、コミュ
ニケーション能力を総合的に発揮するト
レーニングワークブック。1900円

日常から考える コミュニケーション学

◎メディアを通して学ぶ
池田理知子 著
私たちと他者をつなぐメディアの分
析を通してテキスト。2000円

コミュニケーション研究法

末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子編
研究倫理などの心構えから、ファイ
ルドワークや実験法、質問紙法、統計
まで、コミュニケーション研究に必
須の多彩な手法を解説。3200円

国際結婚家庭の 言語選択要因

◎韓日・日韓国際結婚家庭の言語継
承を中心として 花井理香 著
どの言語を選択するのか。5200円

社会調査のための 計量テキスト分析

◎内容分析の継承と発展を目指して
樋口耕一 著
田中Codei開発者による解説。2800円

リフレクティヴ

◎会話についての会話という方法
矢原隆行 著
じっくり聞き、考え、相手に返す、
会話による新たなコミュニケーション
空間の創出方法を開拓。2000円

大学1年生のための 日本語技法

長尾佳代子・村上昌孝 編
徹底した反復練習で、日本語作文の基礎
をみがく初年次テキスト。1700円

メディア・コンテンツ論

岡本 健・遠藤英樹 編
アニメ制作や著作権、同人文化など、現
代社会に遍在し氾濫するメディア・コ
ンテンツを、理論的・実務的視点から多
角的に読み解く。2500円

連想語頻度表

◎3モールの漢字・ひらがなカタカナ表記語
水野りか 編 (CD-ROM付)
千名近くを対象とした大規模調査から
作成された300語の刺激語とその連
想語の最新データベース。4800円

交錯する多文化社会

◎異文化コミュニケーションを捉え直す
河合優子 編
日常の中の複雑なコンフリクトを、イ
ンタビューやフィールドワーク、メデイ
ア分析を通じて読み解く。2600円

最強の社会調査入門

◎これから質的調査をはじめよう人のために
前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下 衆 編
「聞いてみる」「やってみる」「行ってみ
る」「読んでみる」ことから始まる社会
調査の極意を伝授。2300円

教育の国際比較と各国教育の展開

アセアン共同体の市民性教育

平田利文編著 A5・上製・三二五頁・三二七〇〇円

タイの人権教育政策の理論と実践

馬場智子著 A5・上製・二〇〇頁・二八〇〇円

統一ドイツ教育の多様性と質保証

坂野慎二著 A5・上製・二四四頁・二八〇〇円

チュートリアルスの伝播と変容

竹腰千絵著 A5・上製・二四四頁・二八〇〇円

カナダの女性政策と大学

犬塚典子著 A5・上製・二八八頁・三九〇〇円

東アジアの大学・大学院入学選抜制度の比較

南部広孝著 A5・上製・二〇八頁・三〇〇〇円

アメリカ公立学校の社会史

W・J・リース著 浅沼茂・小川佳万監訳 A5・上製・五二八頁・四六〇〇円

多様性と向きあうカナダの学校

A5・上製・二二六頁・二八〇〇円 児玉奈々著

国際移動と異文化・多文化

東アジアにおける留学生移動のパラダイム転換 大学国際化と英語プロ
嶋内佐絵著 A5・上製・三二二頁・三六〇〇円

EUにおける中国系移民の教育エスノグラフィ

山本須美子著 A5・上製・三二六頁・四五〇〇円

海外日本人社会とメディア・ネットワーク

吉原直樹・今野裕昭・松本行真編著 A5・上製・四七二頁・四六〇〇円

異文化間架橋の理念と実践

クリティック多文化、異文化 文化の捉え方を超克する
馬淵仁著 四六・上製・二四八頁・二四〇〇円

国際教育開発の研究射程

「持続可能な社会」のための 比較教育学の最前線
北村友人著 A5・上製・二四〇頁・二八〇〇円

グローバル教育の全体像

モデル、ネット、市場化、ロー J・スプリング著 北村友人監訳
ポスト2015年の教育開発 カル・宗教移民、思考 川口純編
教育開発から教育改革へ

異文化間教育

異文化間教育学会

◆バックナンバーのご案内(分冊でも、全冊でもご購入できます)

- 1 特集＝異文化間教育と教育の国際化 本体2300円＋税
- 2 特集＝異文化間教育と国際理解 本体2300円＋税
- 3 特集＝異文化間教育とコミュニケーション 本体2300円＋税
- 4 特集＝外国語としての日本語の教育 本体2300円＋税
- 5 特集＝在日留学生と異文化接触 本体2300円＋税
- 6 特集＝異文化接触と教育摩擦 本体2500円＋税
- 7 特集＝多文化教育と外国人教育 本体2500円＋税
- 8 特集＝異文化理解と言語教育 本体2500円＋税
- 9 特集＝異文化接触とアイデンティティ 本体2500円＋税
- 10 特集＝異文化間教育学の可能性―学会十五年の回顧と展望 本体2500円＋税
- 11 特集＝異文化間リテラシー 本体2500円＋税
- 12 特集＝異文化間教育の実践的展開―その理論と方法 本体2500円＋税
- 13 特集＝留学生支援システムの最前線 本体2500円＋税
- 14 特集＝小学校の英語教育―異文化間教育からの提言 本体2500円＋税
- 15 特集＝異文化間トレランス〈20周年記念〉本体3000円＋税
- 16 特集＝異文化受容の転機 本体2500円＋税
- 17 特集＝「総合的な学習」と異文化間教育 本体2000円＋税
- 18 特集＝地域ネットワークと異文化間教育 本体2000円＋税
- 19 特集＝越境のもたらすもの 本体2000円＋税
- 20 特集＝異文化間カウンセリングの今日的課題 本体2000円＋税
- 21 特集＝在日外国人教育の現在 本体2000円＋税
- 22 特集＝異文化間教育研究と「日本人性」 本体2000円＋税
- 23 特集＝異文化間教育の現在 本体2000円＋税
- 24 特集＝異文化間教育の語り直し―他者・境界・文節化 本体2000円＋税
- 25 特集＝異文化間教育と教師 本体2000円＋税
- 26 特集＝バイカルチュラル家族―複数の文化と言語が交叉するところ 本体2000円＋税
- 27 特集＝異文化間教育学会25年の回顧と展望 本体2300円＋税
- 28 特集＝地域におけるニューカマー支援と連携―異文化間教育学の視座から 本体2300円＋税
- 29 特集＝異文化間のコミュニケーションを考える 本体2300円＋税
- 30 特集＝多文化共生社会をめざして―異文化間教育の使命 本体2300円＋税
- 31 特集＝生涯を通しての「異文化間教育」 本体2300円＋税

異文化間協働―国際文化の展開

小林哲也 森 聖雨 太田洋子 編著

四六判376ページ 定価(本体3500円＋税)

まえがき

第Ⅰ部 国際文化の展開―異文化をつなぐ関係性

- 1 国際文化を学ぶ―アイデンティティと学際性をめぐって 小林哲也
- 2 国際文化の学を考える―体系としての確立をめざして 森 聖雨
- 3 国際文化の源泉を探る―コスモポリタニズムという希望 佃 繁

第Ⅱ部 文学から文化へ―異文化間理解

- 1 自然と文化が巡り合う場所―つなぎ目としてのシドニーの庭園 大田垣裕子
- 2 宇宙のリズムへのつながり―児童文学の試み 大角洋子
- 3 文化の衝突を超えて―E.M.フォスター『天使も踏むを恐れるところ』 太田洋子
- 4 条理と不条理の間―ミユエル・スバーク『ブラック・マドンナ』 杉山克枝
- 5 日本文化の多元的認識と「南島」―「ヤポネシア」という視点 西尾宣明

第Ⅲ部 多文化と相互理解―異文化間交流

- 1 相互理解のコミュニケーション―文化的背景の異なる場 樋口勝也
- 2 国際語としての英語―その功罪 伊達民和
- 3 多文化社会アメリカの葛藤と共生―黒人大学をめぐる 権 瞳
- 4 誤解させる日本という国―説明責任をとらない文化 西道 実

第Ⅳ部 実践と理論への志向―異文化間協働

- 1 意識変容と協働の学習―海外体験がもたらすものマッセルホワイト、リンダ・ダイアン
 - 2 異文化間協働の実践―ネパール研修 松田浩志
 - 3 日本語「紹介」の活動―自己の文化の認識から意識の変容へ 関 綾子
 - 4 異文化における教育協力―ミャンマーでの経験をもとに 亀井慶二
 - 5 「地域のつながり」と子育て支援―市民と行政による「食育」の協働 寺田恭子
 - 6 異文化間協働が拓く福祉社会―ボランティア活動は境界を越える 森定玲子
- あとがき 太田洋子

アカデミア出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町1-6 TEL.075-771-7055 FAX.075-771-9595